

高槻市文化財調査概要Ⅷ

嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・8



1984

高槻市教育委員会

は　し　が　き

今年度も嶋上郡衙跡を中心として、市内各所に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。とくに嶋上郡衙跡では郡衙北辺部におきまして、古墳時代初頭の竪穴式住居跡を多數発見し、この周辺が畿内屈指の大集落であることを確認いたしました。このことは、単に嶋上郡衙だけでなく、背後に所在する弁天山古墳群の成立を考えるうえで重要な資料を得たと考えます。

また 今年度は従来未知であった芥川遺跡・芝生遺跡を発見いたしました。これら新発見の遺跡は関係者のご好意で調査を実施することができ、それぞれの地域における祖先の活動をより具体的に知ることができるようになりました。さらに、安満遺跡におきましても、弥生時代の集落周辺部の様子が序々に解明されつつあります。

ここに発掘調査の結果をまとめましたが、少しでも地域史解明に役立てば幸いと考えます。このような成果を得るには、関係各位のご協力なしにはなしえないものであり、ここに感謝の意を表すものであります。

高槻市教育委員会

社会教育課長 西 版 弘

目 次

I 鳴上郡衙跡	1
II 水室塚古墳	10
III 富田遺跡	11
IV 中城遺跡	12
V 芥川遺跡	12
VI 安満遺跡	16
VII 安満北遺跡	19
VIII 芝生遺跡	19
IX まとめ	28

鳴上郡衙跡他関連遺跡一覧

編	地 区	調 査 地	面 積	申 請 者
1	34-A・B・C・D	郡家新町(水路)	414.90	高 橋 市
2	7 - I * M 17 - A * B	清福寺町890、891-1・4	2607.00	平 田 熙
3	38 - B	清福寺町915-5	155.46	西 鳴 久 夫
4	38 - I	清福寺町915-4	144.06	岡 本 市 次 郎
5	38 - P	川西町1丁目953-2	104.21	小 谷 忠 史
6	57 - J	川西町1丁目972-9・10	188.38	野 村 賢 治
7	65 - C * G	郡家新町237	261.34	角 山 儀 治
8	67 - H	川西町1丁目1086-13	76.13	西 村 安 民
9	水室塚古墳	水室町2丁目588-4、590-1	87.25	藤 村 守 守
10	" "	2丁目590-10	71.76	中 瀬 敬
11	富 田 遺 跡	富田町4丁目2518	399.20	好 田 栄 夫
12	中 城 遺 跡	昭和台町2丁目25-1	41.40	寺 坂 道 雄
13	芥 川 遺 跡	紫町2	36000.00	日本専売公社
14	安 満 遺 跡	高垣町21	1321.00	K・K 大 江 住 宅
15	安 滿 北 遺 跡	安満中の町483	324.65	下 田 孫 → 渡 迈 克 己 下 田 克 己
16	芝 生 遺 跡	芝生町4丁目371-1	17375.00	高 橋 市

例　　言

1. 本書は高槻市教育委員会が、国庫補助事業（総額 8,000,000 円）として計画し、調査を実施した高槻市所在の史跡・山上郡衙跡附寺跡周辺部及び郡衙関連遺跡の発掘調査事業の概要報告書である。
2. 調査は高槻市教育委員会・市立埋蔵文化財調査センター所長富成哲也指導のもと、技術吏員大船孝弘・橋本久和・森田克行が担当し、大阪府教育委員会の助力を得て、昭和 58 年 5 月 23 日着手し、昭和 59 年 3 月 31 日事業を終了した。
3. 本書の作成にあたって、写真撮影は富成哲也がおこない、遺物整理については、武村雅一・白銀良子・恵谷英俊・宮崎康雄・藤本ゆかりの各氏の援助をうけた。また、大阪府立三島高校教諭・徳丸始朗氏には、芝生遺跡の花粉化石資料の分析結果を御報告いただいた。記して感謝の意を表します。
4. 調査の実施にあたり、平田 蒸・西嶋久夫・岡本市次郎・小谷忠史・野村賢治・角山儀治・西村安民・藤村 守・中瀬 敬・好田栄夫・寺坂道雄・下田孫一・渡辺克己・下田克己・日本専売公社・K・K 大江住宅・高槻市などの援助をうけた。また本市文化財保護審議会委員原口正三氏には、調査全般について御指導いただいた。ここに記して感謝の意を表します。

島上郡衙跡他関連遺跡群発掘調査概要

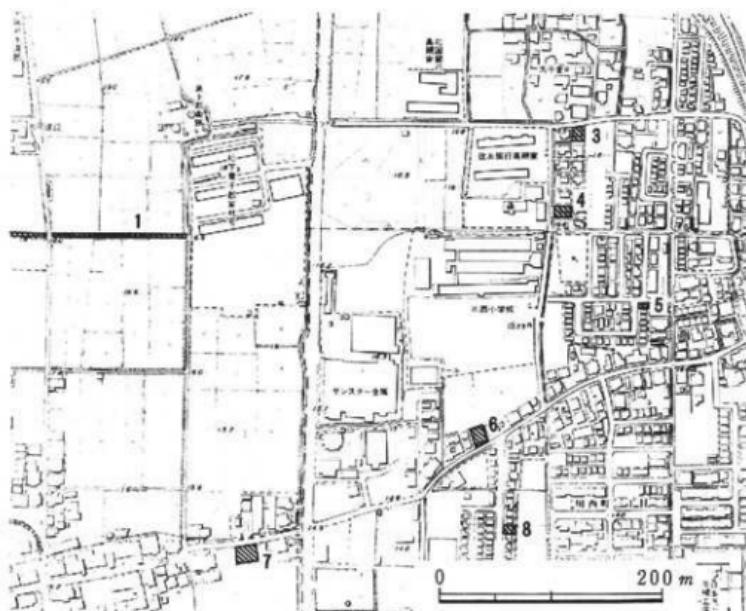
I 島上郡衙跡

1. 34-A・B・C・D地区の調査

高槻市郡家新町の公有水路にあたり、小字名は宮脇・屋上と称する。この水路は芥川廃寺の中心部から南方約100mにある東西の水路である。

調査地は東西約150mの範囲で、東側の約70mは史跡境界線と北側で接している。基本的な層序は、耕土(0.2m)、床土(0.2m)、黒色土層(0.4m)(遺物包含層)、青灰色～茶褐色粘土層〔地山〕である。南北に走る市道より西側の水路の層序は、耕土(0.2m)の下がすぐ地山面の黄褐色粘土層となり、床土・遺物包含層はまったく認められなかった。(図版第2)

出土遺物は芥川廃寺に近接することから、多量の瓦類の出土が予測されたが、意に反し水路全体でコンテナ半分程度と少なく、しかも遺物の大部分は、水路の中央部で検出した幅約20m、深さ約



挿図1 島上郡衙跡の調査位置図

0.3mの自然の流路内からであった。遺物は各時代のものがわずかであるが出土している。旧石器時代のサヌカイト製剝片(2)、弥生時代後期の高杯片(3)、古墳時代の土師器壺片(4)、須恵器壺片(6)、須恵器杯身(1)である。芥川廃寺に伴う瓦片は約10点程があり、軒平瓦は重弧文(7)と唐草文(9)の2点である。その他の平瓦片にも、綱印目・布目を残すものがあるが、いずれも細片である。

遺構は人工的なものは認められず、自然の流路が2~3ヶ所あるだけである。地山面の高さは16.5~17mを測る。史跡指定地より西方一帯は、これまでの分布調査によって、遺構の希薄な地域と考えられていたが、今回の調査においてもまったく人為的な遺構を検出することができなかつた。

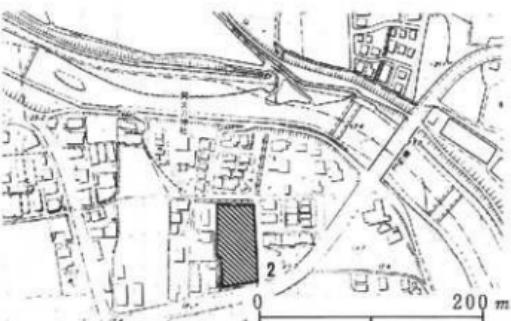
今後、周辺での調査に期待すべき点が大きい。(大船)

2. 7-1・M, 17-A・B 地区の調査

高柳市清福寺町890番地にあたり、小字名は大畠である。武内阿久刀神社の南東約50m、嶋上郡衙の史跡指定地北限から約100m北の地点で、現状は畠である。このたび、事務所兼倉庫建設が計画されたため発掘調査を実施した。

遺構(岡版第4~8、53~57)

基本的な層序は、耕土下は灰褐色粘土(未土・0.2~0.3m)、暗褐色土(0.4~0.6m)と堆積し、地山は黄褐色砂質土である。地山は南へ下降し、北と南では約0.4mの差がある。また、調査区南側では地山上に泥炭化した暗灰色粘土が堆積している。地山は基本的に砂質土であるが、地山内に礫の混じる部分が多く、検出された竪穴式住居址はこれを避けている。



挿図2 嶋上郡衙跡の調査位置図

遺構は弥生時代と古墳時代に大別でき、奈良時代に属すものは無く、平安時代末のものが若干ある。

弥生時代の遺構は土壙墓27基(D1~D27)、壺棺墓2基(K1・K2)、溝である。

土壙墓は調査区中央部に集中し、その長軸はほぼ東西方向にある。西側のD1~D8と東側のD9~D25の2グループに分けられる。D1とD10には数点の畿内第Ⅲ様式期の土器が副葬されていた。他はほとんど副葬品がなく、時期を確定できないが、後述の壺棺墓が第Ⅱ、Ⅳ様式期であるところから、弥生時代中期とみて大過ないだろう。

D 1 はほぼ長方形で長さ 1.75m、幅 1.1m、深さ 0.1m を測り、内部から第Ⅳ様式の甕・高杯が壊された状態で出土した。D 2 は小判形で長さ 1.4m、幅 0.85m、深さ 0.4m を測る。D 3 はほぼ長方形で長さ 1.5m、幅 0.9m、深さ 0.3m を測る。D 4 は不定形で、長さ 1.4m、幅 0.8m、深さ 0.2m を測る。D 5 も不定形で、長さ 1.5m、幅 0.9m、深さ 0.1m を測る。D 6 はほぼ長方形で長さ 1.8m、幅 0.9m、深さ 0.25m を測る。D 7 は不定形で長さ 1.1m、幅 0.7m、深さ 0.15m を測る。D 8 は長方形に近く長さ 1.9m、幅 0.75m、深さ 0.2m を測る。D 10 は不定形で長さ 1m、幅 0.65m、深さ 0.3m を測る。D 11 は長方形で長さ 1.2m、幅 0.7m、深さ 0.1m を測る。D 12 はほぼ長方形で長さ 2.1m、幅 0.8m、深さ 0.5m を測る。掘方は尖底状を呈する。D 13 は不定形で、D 14 と重複する。長さ 1.2m、幅 0.6m、深さ 0.15m を測る。D 14 は小判形で長さ 1.2m、幅 0.5m、深さ 0.4m を測る。D 15 は長方形の掘方を呈し、木棺墓とみられる。長さ 1.65m、幅 1m、深さ 0.2m を測る。D 16 はほぼ長方形で長さ 1.5m、幅 0.9m、深さ 0.3m を測る。D 17 は正方形に近い掘方で一辺約 0.8m、深さ 0.3m を測る。D 18 は不定形で長さ 1.3m、幅 0.9m、深さ 0.2m を測る。D 19 は小判形で長さ 1.4m、幅 0.6m、深さ 0.2m を測る。D 20 は一辺約 0.7m の正方形に近く、深さ 0.1m を測る。D 21 は井戸 2 と重複し、幅約 0.5m、深さ 0.1m を測る。D 22 は不定形で、長さ 1.3m、幅 1m、深さ 0.3m を測る。D 23 は小判形で長さ 1.5m、幅 1m、深さ 0.3m を測る。D 24 は直径約 0.8m の円形に近く、深さ 0.2m を測る。D 25 は不定形で長さ 1.1m、幅 0.6m、深さ 0.15m を測る。D 26 は長さ 0.9m、幅 0.6m、深さ 0.2m の小判形の掘方で、第Ⅲ様式壺が出土した。D 27 は長さ 1.2m、幅 0.7m、深さ 0.3m を測る。甕棺墓は 2 基検出された。K 1 は長径 1m、短径 0.85m、深さ 0.1m の隋円形の掘方に第Ⅶ様式の甕が据えられていた。K 2 は直径 0.75m、深さ 0.15m の円形の掘方に第Ⅸ様式の甕が据えられていた。

溝 2 は KH 7 の北側で検出され、幅 0.3 ~ 0.5m、深さ 0.1m を測る。緩く北側へ外反している。溝 3 は KH 16 の北西側で検出され、幅 0.4 ~ 0.6m、深さ 0.1 ~ 0.2m を測る。やはり緩く北側へ外反し、内部から第Ⅳ様式土器が出土した。

古墳時代の遺構は方形の堅穴式住居 17 棟 (KH 1 ~ KH 17) と掘立柱建物 1 棟、溝がある。

KH 1 は一辺 6.2m で、周壁下の溝は幅 0.2 ~ 0.3m である。中央部に直径 0.5m、深さ 0.1m の円形跡跡が検出され、四隅に直径 0.2m、深さ 0.1 ~ 0.3m の柱穴をもつ。約 0.2m の埋土には第Ⅶ様式土器と庄内式併行期の土器が数多く含まれ、床面でも約 20 点が検出された。南側周壁のはば中央に 1m × 0.6m、深さ 0.25m の方形土壙が検出された。

KH 2 は東西 4.7m、南北 4.5m で西側へわずかに拡張し、拡張後は東西 5m である。中央部の柱穴を中心に 0.8m 四方程の床面が焼けている。柱穴は拡張後も変らず、直径 0.2 ~ 0.3m、深さ 0.3 ~ 0.6m を測る。南側の周壁中央部に長さ 0.8m、幅 0.55m の方形土壙が検出され、形状からみて二度掘られている。

KH 3 は南東隅のみを検出した。幅 0.1 ~ 0.2m、深さ 0.05m の周溝が 2 本あって、拡張あるいは建て替えが行われている。

KH 4 は KH 3 と重複し、KH 3 より古い。やはり、東南隅のみを検出した。周溝は幅 0.15 ~

0.2 m、深さ 0.03~0.1 m である。地山面に厚さ 0.03~0.05 m の淡黄褐色の粘土を敷いて床面としているらしい。また、床面では布留式土器の壺がほぼ完形で検出されている。

KH 5 (図版第 54) は東西 3.5 m、南北 3.6 m と小形である。周溝は幅 0.2 m、深さ 0.1~0.2 m を測る。明確な柱穴は発見されなかった。床面に布留式土器数点と磁石 1 点を検出した。この住居址の東北隅に小溝で区画された部分がある。幅 0.05~0.07 m、深さ 0.05~0.07 m の小溝で、東側周溝にそって長さ 1.95 m、幅 0.45 m の区画である。南側を区画する小溝は長さ 0.75 m で住居址内側へわずかに突出している。小溝にはまっすぐな板材をはめこんだのではないかと想像されるが確認はない。また、南側周溝のやや東よりで一辺約 0.8 m の方形土壙が検出された。深さ 0.2 m で、上面に小石を敷いていた。内部から遺物は出土しなかった。

KH 6 (図版第 54) は KH 5 と重複し、KH 5 より古い。東西 5.3 m、南北約 5 m、深さ 0.2 m を測る。周溝は幅 0.2 m である。中央に直径 0.5 m の円形炉があり、四隅に直径 0.25~0.4 m、深さ 0.2~0.3 m の柱穴がある。やはり南壁中央部に長さ 1.1 m、幅 0.85 m、深さ 0.3 m を測る方形土壙が検出された。この方形土壙の東側に南周溝の柱穴方向へ、幅 0.1 m、深さ 0.04 m の小溝が直角に掘られていた。また、西南隅は地山面を 0.05 m 程削り残し、長さ 1.9 m、幅 1.2 m のベット状遺構としている。調査途中で、東西の周壁の南側より焼土を検出し、東南隅の床面では炭の堆積と板状の炭化物を、方形ピットの西ではベッド状遺構に沿うように太さ 0.05 m 程の丸太状の炭化物を検出した。おそらく火災の為に廃棄されたものであろう。

KH 7 は溝 1 の延長部などで北側が削られ、幅約 0.2 m の南西隅と南側の周溝の一部を検出するのみで、東西約 5 m とみられる。西側周溝から約 1.8 m 内側に、幅約 0.1 m、深さ 0.03 m の小溝が南北に検出された。

KH 8 は KH 4 の南東で幅 0.15 m、深さ 0.05 m の周溝しか検出されなかった。

KH 9 (図版第 55) は 2 回の増築を行なっている。当初は東西 4.8 m、南北 4 m で周溝は幅 0.2~0.3 m である。中央に直径約 0.8 m の円形炉があり、四隅に直径 0.3 m、深さ 0.4~0.5 m の柱穴がある。南壁中央部よりやや内側に方形土壙がある。一辺約 0.6 m、深さ 0.2 m である。1 回目の増築は東・北・南側に拡げ、周溝が東側では 0.3 m、北・南側では約 0.5 m 外側にずれている。また、柱穴も 0.3~0.4 m 東側へずれている。2 回目の増築では、当初より 0.9~1 m 程全体に拡げている。周溝も幅が 0.35~0.4 m と広くなっている。柱穴は 1 回目の増築時のものを使用しているのかよく判らない。南壁中央部にやはり土壙がある。直径約 0.6 m、深さ 0.3 m の円形で、これを中心にするようにして、東西に幅 0.1 m、深さ 0.03~0.1 m の小溝が 3 本検出された。西側の小溝は南壁と直角に 1.65 m、東側の小溝は柱穴まで約 1 m、さらにもうひとつ東側に 0.6 m の長さが確認できた。加えて南壁と平行して内側に 1.1 m の地点にやはり小溝が検出され西側小溝と東側の内側小溝と直交し、住居址南側を方形に区画している。約 0.2 m の埋土には、畿内第Ⅳ様式土器と布留式土器が混在していた。

KH 10 は KH 9 と重複し、前後関係はわからない。東西約 6 m、南北 5.1 m を測る。中央部に炉があり、柱穴は直径 0.2~0.3 m、深さ 0.15~0.2 m で西南隅のものは後出の柱穴に削除されている。南周壁の中央で、長さ 0.8 m、幅 0.6 m、深さ 0.2 m の不定形土壙が検出された。

K H11にはコの字状の周溝が認められ、一辺 4.3 m を測る。周溝幅は 0.15 ~ 0.2 m、深さ 0.05 ~ 0.1 m である。

K H12は南西隅しか確認できなかった。周溝は幅 0.2 ~ 0.3 m、深さ 0.1 m である。

K H13は柱間が 2.9 m ~ 3.2 m と不揃いであるが、柱穴の状態から竪穴式住居の周壁が削除されたものとみられる。柱穴は直径 0.3 ~ 0.4 m、深さ 0.35 ~ 0.5 m である。

K H14、K H15は隅部の一部しか確認できなかった。いずれも幅 0.1 ~ 0.2 m、深さ 0.03 ~ 0.07 m である。

K H16(図版第 56) は東西 5.6 m、南北 5.4 m で中央部に炉跡があり、四隅は直径 0.2 m、深さ 0.2 ~ 0.4 m の柱穴がある。やはり、南壁中央部に長さ約 0.8 m、幅 0.5 m、深さ約 0.1 m の方形土壙があり、すぐ東側に磁石が検出された。この土壙の東側に南壁と直交するように幅約 0.1 m の小溝が内側へ約 0.6 m の長さで掘られていた。また、西南の柱穴から東側へ同様の小溝が、さらにその小溝と直交する小溝も検出された。

K H17は K H 1 の南東に点在する柱穴群内にあり、柱間が 2.2 m で、柱穴は直径 0.3 m、高さ 0.2 ~ 0.3 m を測り、周壁が削除されたものとみられる。

K H18は幅 0.2 m、深さ 0.03 ~ 0.05 m を測る周溝の一部が約 4 m 検出するのみである。

K H19は掘立柱建物で、桁行 3 間 (4.5 m) × 裁行 3 間 (4 m) で、方向は N - 80° - E である。柱穴は一辺 0.5 ~ 0.6 m の不揃いな掘方で、底部に柱を据えるために小ピットを掘っている。掘方内から古墳時代の須恵器が出土し奈良時代より遡るものとみられる。

溝 1 は N - 60° - E の角度をもって、調査区西壁中央部から調査区中央にむけて検出された。幅 1.5 m、深さ 0.5 ~ 0.6 m を測る。西壁から約 5 m まではしっかりとした掘方であるが、それより東ではわずかな窪みとしてつづき、K H 7 付近で深さ約 0.2 m としっかり掘られている。しかし、これより東では検出されなかった。溝内から古墳時代後期から末期にかけての須恵器などが若干出土した。

平安時代後期から末期にかけての遺構は K H 9 + 10 南側の井戸 1 と井戸 2、そして調査区南壁ぎわの井戸 3 (図版第 57) と小ピッチ群がある。

井戸 1 は長径 1.2 m、短径 1.1 m、深さ 0.6 m の円形、素掘りで上部から 11 世紀末の瓦器碗が出土した。

井戸 2 は直径 1.9 m、深さ 1.8 m の円形で底部に直径 1.2 m、高さ 0.2 m の曲物をすえ、上部は掘方壁とのすき間がないように石積みされていたが、大部分は崩壊していた。内部から土師器皿と黒色土器 (A・B類) 碗の破片が出土した。10 世紀後半～末とみられる。

井戸 3 は直径 0.9 m、深さ 0.55 m の円形、素掘りで、内部から 11 世紀末の瓦器碗破片が出土している。他に調査区南西に一辺 0.3 ~ 0.4 m、深さ 0.1 ~ 0.15 m 程の方形ピットが数個検出された。建物とするには不揃いであるが、1 間 × 2 間の簡単な小屋掛け程度のものが想像できる。

遺 物 (図版第 7 ~ 26)

当調査区では、竪穴式住居から多量の土器が出土したのをはじめ、弥生時代中期から、鎌倉時代頃までの遺物がある。

土壤基D1からは畿内第Ⅶ様式の壺(1・84・85)、高杯(2・86)が、D10からも壺(87～89)、甕(3・92・93)が出土している。またD10には第Ⅱ様式甕細片(91)もある。D26からは第Ⅲ様式の壺(4)が出土している。

竪穴式住居KH1からは多量の土器が出土している。復原したものをみると壺4点、甕13点、高杯12点、鉢8点、手培り型土器1点で、高杯・鉢の占める割合が高い。

甕は畿内第Ⅴ様式の典型的なもの(5)と、球形の体部に櫛描文を施すもの(6)、直口で頸部に凸帯のあるもの(7)がある。甕(8～10・13・61)は最大腹径が体部中位にあり、粗い叩き目を頸部から体部中位まで施している。内面はなでて仕上げている。小形で口縁が受け口状になるもの(12)がある。

高杯は杯部が大きく外反するもの(14～16)や、杯部の底が狭く、脚部が短いもの(17・18)、杯部が碗状になるもの(20・24)、さらに大きく外反する杯部に脚柱部から屈折して脚端部へつながるもの(21～23)など多様である。鉢は直口(25～28)と口縁が屈曲するもの(29～31)がある。直口のものには底部に孔をあけるもの(27・28)がある。また、脚をつけ、口縁を片口状にしたもの(32)がある。手培り型土器(33)も出土している。この他に縄文晩期の船橋式土器とみられる破片も出土している。このように、甕や鉢は第Ⅴ様式期に属するものであるが、壺や高杯には圧内式とみられるものがある。いずれも床面上で検出されたものである。

竪穴式住居KH2からは広い口縁部外面に凹線を入れた壺と甕がある。また布留式の直口壺や甕、高杯が出土している。

竪穴式住居KH4からは球形体部に直立する頸部から大きく開く口縁部の壺(34)が出土している。外面は刷毛目で仕上げている。

竪穴式住居KH5からは口縁端が外反する二重口縁壺(35)や扁平な体部に短かく外反する小形丸底甕(36～38)が出土している。甕には器高約20cmで丈高の感があり、口縁上端を平にするものの(41)と、器高10～13cmで球形に近い体部のもの(39・40)がある。外面は細かい刷毛目仕上げである。鉢には口縁が二段に屈曲する精製品(44)と口縁がわずかに屈曲する粗製品(43)がある。器台(42)は精製品である。小形丸底甕は扁平な体部に外反する口縁がつき、やはり精製品と粗製品がある。また、砥石(148)が床面から出土している。

竪穴式住居KH9からは、鐵鐵とみられるもの(149)が出土している。壺(48)は口縁外面に凹線を入れる二重口縁である。高杯は内外面をていねいにみがくもの(49)と刷毛目仕上げするものの(70)がある。小形丸底甕は口径が体部をうわまわるもの(46)と短い口縁で外面な刷毛目を施すもの(47)がある。この他、畿内第Ⅶ様式や布留式の甕も出土している。

竪穴式住居KH16からは口縁が大きく外反する小形丸底甕(50)や砥石(151)が出土している。溝1・溝4からは須恵器蓋杯(52・53)、高杯(55)、横瓶(54)、土師器皿(111)などが出土している。

井戸1からは内外面を丁寧に磨きした瓦器椀(58・59)が出土している。井戸2からは黒色土器A類の椀(124・125)とB類椀(56)、土師器皿(121～123)、土師器甕(57)が出土している。甕にはススが厚くついていた。

この他の遺構ではKH15付近のピットから畿内第Ⅳ様式の鉢・壺（62・63）が出土している。包含層から出土したものには畿内Ⅳ様式の壺・鉢類（102～107）や肉厚の底部をもつ大型の鉢（64）がある。第Ⅴ様式では無頬壺（60）、壺（65）、鉢（71・77）などがある。庄内・布留式に属する壺（66・67）、壺（68・69）、小形丸底壺（72～76）、器台（78～81）も出土している。土師器の把手付椀（82）や脚台（83）もある。

須恵器では細かい波状文を施し凸帯をつけた壺や壺が出土している。瓦（118・119）はほとんど出土していない。灰釉陶器皿（116）、東播系須恵器鉢（117）、中国製白磁皿（129）、綠釉椀（130）、黒色土器椀（13・1・132）、土師器皿（147）、瓦器椀（135～147）なども出土している。（126・127）は古墳時代の製塙土器であろうか。石器は石錘、扁平石斧、剥片（152～155）も若干出土している。

小 結

今回の鶴上郡衙7-I・M、17-A・B地区の調査では多数の竪穴式住居跡が検出された。これまでの調査とあわせて、阿久刀神社周辺の様子がほぼ解明されたといえる。

まず、第Ⅳ様式期を中心とする弥生時代中期の櫛棺墓と土壤墓群が検出されたが、調査区西方の6-E・F、6-I・J・K・M・N・O、16-B・C・F・G区では6基の方形周溝墓が検出されており、集落周辺部の墓域であったことが判明した。また、周溝墓群と土壤墓群の距離があり、土壤墓群もグループ分けできる。弥生時代中期の墓域は市立川西小学校周辺でも検出されているが、こちらは第Ⅱ・第Ⅲ様式期であり、墓域が移動している。集落はこれらの墓域にはば近接した地域に在るとみられるがまだ確認されていない。

弥生時代後期では竪穴式住居の数は少なく、中心はもう少し南とみられる。古墳時代（庄内式期を弥生時代とみるか古墳時代とみるか議論があるが、ここでは古墳時代とする）になると、今回検出されたものを含め、阿久刀神社周辺（府道から北約130m四方）には約70棟以上もの竪穴式住居が営まれていることは確実である。竪穴式住居は広場を中心に数棟が1グループを形成しているようである。竪穴式住居には重複したものがいくつか検出されたが、KH1とKH2、KH5とKH6では新しいものはほど規模が小さくなっている。これは、北方の7-A・B地区の調査でも指摘されていることであり、何に基づくのか検討課題である。

竪穴式住居内部の構造についても2・3の調査成果がある。まず、完掘できたKH1、KH2、KH5、KH6、KH10、KH16の南側周壁の中央部にはほぼ長方形の土壤が検出された。KH6、KH9、KH16ではこの土壤の左右を小溝で方形に区画していた。このような方形土壤や小溝による竪穴式住居内部を区画するものは、鶴上郡衙跡のこれまでの調査ではやはり庄内・布留式期にみられ、兵庫県から大阪湾沿岸地域にかけて検出例が多い。最近では綾部市青野西遺跡でも周壁に土壤を掘った例がある。この土壤はKH2、KH9の状況からみて建て替え、増築の際には必ず新たに掘られている。その用途は単に周壁下の溝とつながっているため、排水用とするのか、竪穴式住居内へ降りるための梯子穴か、貯蔵穴的なものか、あるいは呪術的意味を持つものなのかは容易に判断できない。KH5では土壤を埋めて上部に小石を敷いている。17-F地区的調査では小石を充満させていた。また、6-E・F地区では内部から炭が検出されている。さらに、庄内・布

留式期に時期がほぼ限定でき、単に排水用、梯子穴とするには疑問がある。

小溝による区画は竪穴住居内部の間仕切りとみられるが、K H 6、K H 9、K H 16のように南側周溝から直角に南側の柱穴に小溝が掘られ、K H 6では西南隅がベッド状に掘り残され、これに平行するように丸太が置かれていたらしい。小溝による区画を行なったK H 9とK H 16の南西隅とベッド状に掘り残されたK H 6の南西部は長さ1.9～2.5m、幅0.8～1.2mである。南東隅はこれよりも長さが短い。いずれも同じ性質のものとみられるが収穫物を収納する空間か、寝所かは想像の域を出ないが6-J・K・N・Oの調査区では寝所を想定している。さて、K H 5でも東北隅に小溝による区画が検出された。小溝には板材を横にはめこんだものとみられ、板の上端に板を敷いて寝台状のものが想定できる。寝台の資料として八尾市美園遺跡出土の家型埴輪内部の片隅にとりつけられた寝台がある。美園遺跡出土の家型埴輪は4世紀末～5世紀初めとみられ、高床式である点も考慮しなければならない。古墳時代以降の風俗に、多分に大陸的影響が認められるが、住居内部にも影響を与えたのだろうか。

今回、検出された竪穴式住居群は北方の弁天山古墳群が形成される年代と相前後している。恐らく古墳群造営には多くの集落構成員が動員されたとみられるが、弁天山古墳群の被葬者自身も当調査地区周辺に居を構えていたのだろう。これ以後の遺構は古墳時代後期～末期の溝と掘立柱建物を検出しているが、まとまった遺構は少ない。(橋本)

3. 38 - B 地区の調査

高槻市清福寺町915-5番地にあたり、小字名は川西北浦と称する。現状は宅地である。

調査地は、市立川西小学校北東約100mに位置する。調査は面積が狭小で盛土が厚いため、中央部に3m角のトレンチを設けた。層序は盛土(0.5m)、旧耕土(0.1m)、暗灰色砂層(0.1m)、暗灰色粘土層(0.1m)、暗褐色土層(0.2m)〔遺物包含層〕、暗黄褐色土層〔地山〕である。遺物は暗褐色土層から、弥生時代後期の壺・壺片が少数出土したが、いずれも細片である。検出した遺構は、溝1条と柱穴4個である。溝は調査区中央部で検出した。規模は幅0.7m、深さ0.1mを測る。溝の埋土は暗褐色土層で、遺物は認められなかった。柱穴は直径0.2～0.7m、深さ約0.05～0.2mを測る。時期については、出土遺物が認められないため明確でないが、埋土の色調などから柱穴群の方が新しいと思われる(図版第58)。

調査区の南側一帯は、弥生時代中期には多数の方形周溝墓群と土塙墓が検出される巨大な墓域である。しかし、後期になると墓域から居住地域になったらしく、多くの竪穴式住居址が発見されている。今回の調査区は、面積が狭小で検出した遺構も明確でないが、溝は方形周溝墓の一部と推定され、柱穴群は後期の住居群に関連するものであろう。(大船)

4. 38 - I 地区の調査

高槻市清福寺町915-4にあたり、小字名は川西北浦である。現状は宅地で、住宅の改築が計画されたため、発掘調査を実施した。

遺構・遺物（図版第3a、58）

届出地の西側に $2.5 \times 3.5\text{ m}$ の調査域を設けた。層序は盛土(0.3m)、耕土(0.2m)、黄灰色土(0.3m)、暗褐色土、黄褐色土〔地山〕となる。遺構は東北部に下降する落ち込みがある。東北隅で約40cmの深さを測るが、肩部はなだらかである。遺物は暗褐色土から古墳時代とみられる土師器の細片が数点出土している。（橋本）

5. 38-P地区の調査

高槻市川西町1丁目953-2番地にあたり、小字名は川西北浦と称する。現状は宅地である。

今回の調査地は、本遺跡の東端に位置しており、川西小学校より東方約100mの住宅密集地の中である。調査は届出地の中央に東西2m、南北4mのトレンチを設けて実施した。層序は盛土(0.9m)、旧耕土(0.3m)、青灰色粘土層(0.1m)、暗黃褐色粘土層(0.4m)、暗灰褐色粘土層(0.6m)、暗黒色粘土層(0.3m以上)であるが、トレンチが深くなりすぎ危険なため、地山面の検出が不可能となった。遺物包含層は暗灰褐色粘土層と暗黒色粘土層の2層であるが、出土遺物が少なく、形成時期については明確でない。出土遺物は、暗黒色粘土層中から弥生式土器・土師器片が数点出土したが、いずれも細片である。

今回の調査地は、本遺跡の東端に形成された方形周溝墓群のさらに東側に位置することから、これまで遺構の希薄な地域と考えられていた。しかし、今回の調査結果によって、遺跡の範囲はさらに東側に拡がることは確実であり、さらに東辺部の調査が望まれる。（大船）

6. 57-J地区の調査

高槻市川西町1丁目972-9・10番地にあたり、小字名は大井田と称する。現状は宅地である。

調査地は市立川西小学校の南方約100mに位置し、北側は史跡境界線に接し、南側は西国街道（旧山陽道）に面している。

調査は東西4m・南北2mと東西2m・南北1mのトレンチを2ヶ所に設定し実施した。両トレンチの基本的な層序は盛土(0.2m)、旧耕土(0.1m)、黄灰色砂質土層(0.5m)、暗褐色土層(0.05m)、黒灰色粘土層(0.1m)、青灰色砂層(0.3m)、黄灰色砂層〔地山〕である。

検出した遺構は、南側トレンチの中央部に土壤1基と北東隅に落ち込み1ヶ所がある。検出した遺構は、時期不明の土壤と落ち込みが各1ヶ所であり、山陽道と考えられる石敷・側溝等はまったく認められなかった。また出土遺物についても、弥生時代後期後半に属するものばかりであって、古墳時代以降の遺物は認められなかった。今回の調査結果から旧山陽道の位置を推測すると、当該地よりも、もう少し北側に位置するものと考えられる。（大船）

7. 65-C・G地区の調査

高槻市郡家新町237番地にあたり、小字名は宛本である。旧西国街道のすぐ南側で北側では山陽道路とその側溝が検出されている。現状は宅地で、今回倉庫建設が計画されたため発掘調査を実施した。

遺構・遺物（図版第3b）

届出地の東側部分に $3m \times 5m$ の調査 sondage を設けた。層位は盛土 ($0.5 \sim 0.6m$)、耕土 ($0.1 \sim 0.2m$)、黄褐色土 ($0.5m$)、黄色土 ($0.2 \sim 0.3m$) と堆積し、その下層は灰色砂礫が厚く堆積している。黄色土が地山に相当するが、どの層からも遺構・遺物は検出されなかった。（橋本）

8. 67-H 地区の調査

高槻市川西町1丁目1086-13番地にあたり、小字名は千原橋と称する。現状は宅地である。

今回の調査地は、本遺跡の南端にあたり、市立川西小学校南方約 $200m$ に位置する。調査は届出地の中央部に $2m$ 角のトレンチを設けて実施した。層序は盛土 ($1m$)、旧耕土 ($0.2m$)、青灰色粘土層 ($0.2m$)、暗灰色粘土層 ($0.1m$)、黒灰色粘土層 ($0.3m$)、灰色礫土層〔地山〕となり、調査地内では遺物包含層を認めることができなかった。また、調査区が狭小なこともあります、遺構等は明らかでない。（大船）

II 水室塚古墳

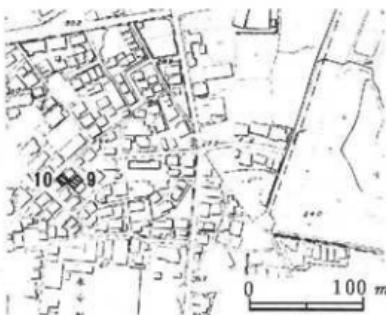
9. 水室塚古墳の調査

高槻市水室町2丁目588-4、590-1番地にあたり、小字名は塚後と称する。現状は宅地である。

水室塚古墳は、史跡・今城塚古墳の西方約 $100m$ に位置する北東向きの前方後円墳である。埴丘および周濠部は、現在すべて宅地化され、古墳の面影はない。

今回の調査地は、埴丘部から北西方約 $50m$ に位置し、前方部の外濠部と推定される地点である。調査はまず届出地の北・南側の2ヶ所に、 $2m$ 角のトレンチを設けて実施した。北側トレンチの層序は盛土 ($0.1m$)、旧耕土 ($0.1m$)、床土 ($0.1m$)、暗灰褐色土層 ($0.2m$)〔遺物包含層〕、黄褐色粘土層〔地山〕であり、南側トレンチの層序は旧耕土 ($0.2m$)、床土 ($0.2m$)、暗灰褐色土層 ($0.2m$)〔遺物包含層〕、黄褐色粘土層〔地山〕で、地山は予想に反してほぼ水平であった。地山面は標高 $28.9m$ を測る。遺物包含層からは土器片が数点出土したが、いずれも細片である。

今回の調査区の地盤断面を見る限り、調査地は埴丘の外側である可能性が高い。古墳の範囲については、将来の調査に期したい。
(大船)



挿図3 水室塚古墳の調査位置図

10. 氷室塚古墳の調査

高槻市氷室町2丁目590-10番地にあたり、小字名は塚後と称する。現状は宅地である。

今回の調査地は、墳丘部から北西方約50mに位置し、前回の調査地と南東隅で接している。調査は届出地の北西部と中央部の2ヶ所に2m角のトレンチを設けて、層序の観察をおこなった。両トレンチの基本的な層序は、盛土(0.1m)、旧耕土(0.1m)、整地層(1.5m)、青黄色粘土層〔地山〕である。

今回の調査地でも前回と同様に、氷室塚古墳に関連する遺構・遺物は認められなかった。今回の調査地の特徴としては、地山面が非常に深いことであり、周濠の可能性が考えられる。(大船)

III 富田遺跡

11. 富田遺跡の調査

高槻市富田町4丁目2518番地にあたり、小字名は市西ノ口町と称する。現状は宅地である。

今回の調査地は、普門寺の南方約50mに位置し、昭和51年夏に調査した旧富田小学校跡地とすぐ北側で接している。調査は届出地の中央部に3m角のトレンチを設定して、層序の観察および遺構の確認をおこなった。層序は盛土(0.2m)、黄灰色土層(0.2m)、暗灰色粘土層(0.6m)、暗黄緑色疊土層〔地山〕である。出土遺物は、暗灰色粘土層から近世の陶磁器片数点と瓦片を若干出土したのみである。また、調査区が狭小なこともあって、遺構を検出すことができなかった。

今回の調査区は、富田遺跡のほぼ中心に位置することから、居住地域に伴う遺構の検出が当然予測された。しかし、後世の搅乱が広範囲にわたって著しくおこなわれており、遺構・遺物の検出はまったく望めない状況を呈していた。(大船)



挿図4 富田遺跡の調査位置図

IV 中城遺跡

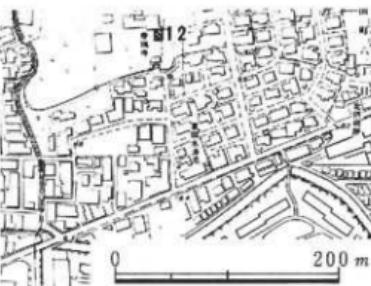
12. 中城遺跡の調査

高槻市昭和台町2丁目25-1番地にあたり、小字名は慶瑞寺と称する。現状は宅地である。

中城遺跡は富田遺跡と同じく低位段丘の南端部に立地する集落遺跡である。遺跡の規模は径約200mの範囲と推定され、標高は約8~12mを測る。今回の調査は、慶瑞寺の庫裡の増築工事に伴うものであり、届出地の面積が狭小なことから、2m角のトレンチを南北側の2ヶ所に設けて、層序の観察と遺構の確認をおこなった。北側トレンチの層序は盛土(0.5m)、暗褐色土層(0.1m)〔遺物包含層〕、黄褐色礫土層〔地山〕であり、南側トレンチの層序は盛土(0.5m)、黄褐色礫土層〔地山〕である。

遺構は調査区が狭小なこともあって、まったく認めることができなかった。出土遺物は非常に少なく、北側トレンチから出土した土師器の杯片が若干ある。いずれも細片で、完形に復原することができなかつたが、径約10cm程度のものと思われ、所属時期については胎土などから中世のものと考えられる。

中城遺跡はこれまで数回の調査がおこなわれてきたが、いずれも小規模な開発に伴うものであつて、明確な遺構等を検出したことはない。しかし、遺物包含層からは弥生式土器片から中世の陶磁器片までの各時代のものが混って出土し、相当長期間にわたって営まれた集落址であったことが推定されている。(大船)



挿図5 中城遺跡の調査位置図

V 芥川遺跡

13. 芥川遺跡の調査

国鉄高槻駅西側には旧西国街道があって、当時は芥川宿として栄えた地域である。また、ここには芥川城があったと考えられ、その城跡は日本専売公社高槻工場付近とされている。調査地は高槻市紫町2番地にあたり、小字名はトツガイと称する。

調査はA~Gのトレンチを設けて実施した。C・D・E・Gでは遺構・遺物を発見したため順次トレンチを拡張し実施した。

遺構(図版第27a・60~62)

A・Bトレンチは工場南側で、以前には紡績工場の寄舍等があったため、付近の搅乱が著しかつ

た。それぞれ幅2mで、Aトレンチは南北約35m、Bトレンチは東西に約70m設けた。両トレンチとも0.6~0.7mの盛土下に耕土(0.1~0.2m)、青灰色粘土(0.2~0.4m)が堆積し、地山は黄褐色砂礫である。遺構・遺物はまったく検出されなかった。

Cトレンチは調査区西方で、建物基礎や各種配管のため連続してトレンチを設けることができず、C1~C4に分けた。C1~C3トレンチでは

いずれも約0.8mの盛土下に耕土(0.1~0.2m)、黄灰色粘土(0.2m)、灰色粘土(0.2~0.4m)と堆積する。C1トレンチでは、灰色粘土下は青灰色砂礫(地山)となる。この青灰色砂礫はC1トレンチ北部でレンズ状に北方へ下降し、北端で深さ0.5mを測る。上部に青灰色粘土、下部に暗灰色粘土が堆積する。C2トレンチでは青灰色粘土は0.3~0.35m、暗灰色粘土は約0.1m堆積する。C3トレンチでは、青灰色粘土(0.35m)、その下に青色粘土(0.3m)、暗灰色粘土は北端で青色粘土下にレンズ状に堆積していた。以下、青灰色砂(0.2m)、暗灰色粘土(0.1m)、青灰色砂礫と堆積する。C4トレンチでは、約1mの盛土下は灰色粘土(0.35m)、青灰色砂礫となり、南端で青灰色粘土が南へレンズ状に下降していた。この結果C1トレンチ北部からC4トレンチ南までの約41mは青灰色砂礫を地山とする沼状の窪地で、C3トレンチ付近で最も深く約1mを測る。C1トレンチの北端の青灰色粘土からは畿内第Ⅶ様式土器と庄内・布留式土器が出土し、弥生第Ⅱ様式土器も若干混入する。あたかも沼の岸に投棄されたものようである。他のトレンチでは遺物はほとんど認められなかった。

DトレンチはC・Bトレンチの中間に一辺約8mで設定した。地山は青灰色砂礫で、上部に約0.3mの暗灰色粘土が堆積し、畿内第Ⅶ様式土器や須恵器が出土した。C1トレンチとくらべ、約0.5m地山面が低く、遺構は検出されなかった。

Eトレンチは広く設定した。約0.6mの盛土を除去すると、北側では耕土(0.2m)、青緑色土(0.1m)、黄灰色砂質土(地山)と堆積し、南側へわずかに傾斜する。南側では約0.2mの褐色土が地山上に堆積し、若干の遺物を包含していた。この褐色土を除去すると、調査区中央部から南にかけて溝や土壤墓を検出した。

溝1は調査区東南部を南北方向にまっすぐ流れる自然流路で、幅7m以上を測る。肩部から内側へ約5mまでは深さ0.2~0.3mのレンズ状を呈し、調査区東南隅ではV字状となり深さ0.8mを測る。溝内は粘土と砂礫が交互に堆積し、東南隅で畿内第Ⅶ様式土器と庄内・布留式土器が多量に、



插図6 芥川遺跡の調査位置図

また畿内第Ⅱ様式土器も若干出土した。溝2は長さ約7m、最大幅約2m、最小幅0.7m、深さ0.1mを測る。溝内から畿内第Ⅳ様式土器が全面に検出された。いずれも細かい破片ばかりで完形に復せるようなものはない。方形周溝墓の可能性もあるが、溝が不定形に掘削されているのでゴミ的なものとみられる。

土壤墓はいずれも方形で、溝1の西側で5基(D1～D5)検出された。D1は長さ0.95m、幅0.6m、深さ0.05m、D2は長さ1.2m、幅0.8m、深さ0.1m、D3は長さ0.9m、幅0.5m、深さ0.05mを測る。D4は溝1の肩部で削られ、長さ不明で幅0.75m、深さ0.1mを測る。墓壙の西南隅で第Ⅳ様式期の高杯1点が杯部を下にして副葬されていた。D5はやや不定形であるが、長さ1.5m、幅1m、深さ0.1mを測る。D4を除いて副葬品はなく、畿内第Ⅳ様式土器とみられる細片が若干出土しただけである。他に土壤墓群の北に浅い溝を3本検出している。

FトレンチはAトレンチの東側に設け、旧西国街道が直進するかどうか確かめた。約0.7mの盛土を除去すると耕土(0.1m)、末土(0.1m)、褐色砂質土(0.2～0.3m)と堆積し、地山はA・Bトレンチ同様黄褐色砂疊である。道路敷、あるいはそれに付属するような側溝は検出されなかった。出土遺物は、褐色砂質土から土師器の細片が若干出土しただけである。

G1～G3トレンチは野球場の東側で、遺構・遺物の状況を確認するために設けた幅約2m、長さ3～4mのトレンチである。いずれも、0.4～0.5mの盛土に灰褐色土(0.15～0.3m)、青灰色土(0.1～0.15m)、黄灰色土(0.3～0.4m)と堆積し、地山はC・Dトレンチ同様青灰色砂疊である。黄灰色土に畿内第Ⅳ様式土器が含まれていて、G3では多量に出土した。遺構は検出されなかった。なお、地山面はC1トレンチとほぼ同じである。

遺 物 (図版第27b～35b)

出土した遺物は畿内第Ⅱ様式土器から中・近世の土器と陶器である。C・D・E・Gの各トレンチ(C・Gについては後述する。)から出土した土器類の時期の概要是つぎのとおりである。Cトレンチでは、畿内第Ⅳ様式が79%、庄内・布留式土器(細片で分類できないものがあるためまとめた)が20%、他が10%である。Dトレンチでは第Ⅳ様式が72%、庄内・布留式が20%、他が8%である。Eトレンチでは第Ⅳ様式が86%、庄内・布留式が12%、他が2%である。Gトレンチでは第Ⅳ様式が98%、庄内・布留式が1%、他が1%である。このように庄内・布留式土器は調査範囲の南と西側を中心としている。

Cトレンチ (図版第27b、32a・b)

畿内第Ⅱ様式の壺底部(27・28)が出土している。厚い底部で外面に数個のモミ痕がある。第Ⅳ様式土器には壺(34)、甕(29～31)、鉢(33)と高杯がある。鉢は底部に孔をあけたものとあげ底風のもの(32)がある。庄内・布留式土器には壺・甕・高杯・鉢がある。壺は二重口縁の外縁を竹管文で飾るもの(36)と、直口のもの(35)がある。他に、梯櫛文を施した体部破片(38)もある。甕は褐色の胎土で、頸部内側の後縁が鋭いものと口縁端部の肥厚するものがある。また、甕には二重口縁で外面を刷毛目仕上げし、内面をていねいに削るもの(1)がある。他に管状の土錘(57)が出土している。

D トレンチ (図版第 33 a・b)

第Ⅴ様式土器では壺(44・45)、壺(46・51)、鉢(47)、高杯(48)がある。壺には受口状口縁で外面に刺突列点文の入るものがある。壺は口縁が大きく外反する。鉢はあげ底直口で内面を刷毛目、外面をていねいにヘラみがきで仕上げている。布留式の壺(50)の口縁端内側は肥厚しない。D トレンチでは、他のトレンチより須恵器の比率が多かった。蓋杯(52~56)が主で、蓋は天井部と口縁部の境にわずかな稜がのこり、杯では蓋うけのたちあがりが比較的高い。

E トレンチ (図版第 27 b~31、33 b~35 a)

E トレンチは調査面積が広いこともあり、包含層からも各時期の遺物を出土した。古いものでは畿内第Ⅱ様式の壺とみられる破片が數点ある。時期は不明であるが直径 4.5 cm、厚さ 0.8 cm の土製鋤鍤車(59)と土鍤(58~62)、扁平石斧(58)が出土している。奈良時代の須恵器蓋杯(78~80)、平安時代の灰釉陶器(81~87)、東播系須恵器(88~89)もある。さらに、唐津焼(90)も出土している。

溝 1 からは約 7,700 点の土器破片が出土したが、畿内第Ⅴ様式土器が 82.2%、庄内・布留式土器が 17.7%、その他 0.1% である。もっとも多量に出土した第Ⅴ様式土器のうちわけは高杯 8.2%、壺 34.2%、壺とその他(鉢で区別できないものなど) 57.6% である。

第Ⅴ様式の壺にはくの字状に屈折する口縁のもの(3)と口縁端がわずかに上下に拡張するもの(65)、口縁端を広くつくり凹線を施すもの(66)、さらに長頸で籠記号を描くものがある。小形の直口壺(5)と蓋(22)もある。

壺は丈高で、最大腹径が体部上位にあるもの(6~10)と、最大腹径が体部中位にあり球形に近いもの(11~12)がある。丈高のものは、口縁がくの字状に屈折し、内側には稜がつく。また、口縁端を上方にわずかにつまみあげたものがある。外面は粗い叩き目を施した後、頸部から腹部にかけて刷毛目を施し、内面も刷毛目仕上げである。内外面とも刷毛目仕上げのものもある(4)。

球形に近いもの(12)は、頸部から胴部にかけて連続した叩き目を施し、内面は刷毛目仕上げである。蓋はいずれも外面にススが付着する。

鉢には口縁が外反する大型(13)と直口の小型(15~17)がある。大型は外面刷毛目仕上げでススがつき、小型は底部に孔をあけ、叩き目を施すものと施さないものがある。また、小型の鉢には小さな脚台をつけるもの(14)がある。高杯(18)はていねいにみがいた脚部で、四孔をあける。

庄内式の壺(71)は二重口縁を櫛揃波状と円形浮文で飾る。壺(75・76)は頸部内側に鋭い稜が入りていねいな籠削りをし、胎土が褐色のものと淡黄褐色のものがある。高杯(19)は内外面をていねいにみがきし、杯部が大きく外反している。布留式の壺には二重口縁のもの(70)と小型丸底(72・73)がある。壺(69)は口縁端内側が肥厚し、外面を刷毛目仕上げする。口縁の屈曲する鉢や鼓形器台(74~77)も出土している。高杯(20)は、口縁が外反する浅目の杯部である。この他に土鍤が出土している。土鍤(63・64)は直径 3.5 cm、長さ 5.5~6.5 cm の管状のものと、長さ 7~8 cm、直径 3~3.5 cm で西端が細くなるものがある。

溝 2 の内土壤から出土した壺(26)は球形の脚部で、外面は頸部から胴部にかけて右上がりの細かい叩き目を施している。土壤墓 4 から出土した高杯(24)は内湾する浅目の杯部に大きく広がる

脚がつく。Gトレンチからも畿内第V様式の壺・甕・高杯の破片が出土している。

小 結

今回の調査はトレンチ調査を主にしたが、専売公社の敷地東側半分の様子を知るのに十分な成果を得た。

まず、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構・遺物を各トレンチの状態からEトレンチ西側から野球場南側を中心にして直径約200mの範囲で検出した。さらに、北東へも広がる可能性がある。Eトレンチ西側に居住区域を想定できるが、第II様式土器も若干出土しており、弥生中期から集落が営まれた可能性がある。いずれにせよ、芥川東岸でまとまった弥生時代から古墳時代にかけての資料を得たのは最初であり、これまでほとんど調査の機会がなかった真上・芥川地区を知るうえで重要である。

つぎに、芥川城については、A・B・Fトレンチではまったく遺構・遺物が検出されなかった。戦国期に芥川城が在ったと論じる際、常に引きあいにだされてきた西国街道の屈折についても、もし戦国期以前に直進していたなら、A・Fトレンチで何らかの道路関係遺構が検出されるはずである。結論的に、戦国期の芥川城は芥川上流の城山に残る芥川山城であると考え、芥川山城と専売公社付近に芥川(平)城の両者が存在したという説もはなはだ疑問である。また、専売公社敷地の西側から嚴町にのこる「殿の内」という字名は芥川城を推定するうえで重要な位置を示したが、昭和51年度の調査では、14世紀から16世紀にかけての陶磁器が若干出土しただけで、こちらの方にも否定的な資料しかない。ただ、その周辺に鎌倉時代から南北朝期にかけて芥川宿を本拠とした芥川氏の居館をそこに想定することは可能かもしれない。(横本)

VII 安満遺跡

14. 安満遺跡の調査

高槻市高垣町21にあたり、宅地造成工事に先立って発掘調査を実施した。安満遺跡東部にあたり周辺部のこれまでの調査では方形周溝墓が約60基検出されている。

遺 構 (図版第36・37・63・64)

調査区西壁での層序は耕土(0.2m)、黄灰色土(床土0.2m)、灰色砂礫(0.3m)、褐色土(0.1m)、黄褐色土(0.2~0.3m)、暗灰色粘土(0.6~0.7m)と堆積し、地山は青緑色砂質土あるいは砂礫である。地表面はほぼ平坦で、西南部が0.3m程低い。検出した遺構は方形周溝墓10基である。遺構番号は昭和55年度からの一連番号とした。

34号周溝墓 南北6.5mを測り、周溝は幅1~1.5m、深さは南側が0.25m、北側で約1.1mを測る。東南隅からやや中央よりの南側周溝と、東南隅からやや中央よりの東側周溝から甕が1点づつ検出された。北側周溝でもやや中央よりに甕が1点検出された。いずれも溝底から0.1~0.2m遊離している。



挿図7 安満遺跡の調査位置図

35号周溝墓 東西7mを測る。南側周溝は幅約2m、深さ0.25mである。南側周溝から壺2点、西南隅から壺が1点検出された。いずれも溝底から0.15～0.2m離れており、この周溝墓のみが東へ偏り、他のそれと方向を異にしている。

36号周溝墓 東西9.5m、南北9mを測る。西・南側の周溝は幅2～2.5m、北・東側の周溝は幅1mで、深さは0.3～0.4mを測る。東側周溝付近は灰色砂礫の流れによって部分的にえぐられている。西北隅からやや中央よりの西側周溝に、壺2点と壺1点がほぼ溝底に接して検出された。

37号周溝墓 36号周溝墓の西側に東西3.5m、幅0.4m、深さ0.2mの逆L字状の溝が検出された。北側へわずかに溝がつづき、これまでの調査例からみて小規模な周溝墓と考えられる。遺物は検出されなかった。

38号周溝墓 南北7m、北側周溝は幅2.2m、深さ0.3m、東側周溝は幅1.5m、深さ0.3mを測る。北側周溝の中央部で壺2点、西南隅付近で鉢1点と壺の破片若干を検出した。壺は溝底から0.2m離れていたが、鉢は溝底に接していた。いずれも、外側よりの溝底から出土した。

39号周溝墓 調査区西南隅で一部を検出するが、全様は明らかでない。溝底からは、0.1～0.2m離れて大型の壺2個体分の破片が検出された。

40号周溝墓 東西8.5m、南北7mを測る。東側周溝は幅2m、深さ0.2m、北、西、南側周溝は幅1～1.3m、深さ0.3～0.35mを測る。38号周溝と接する西北隅で、壺の口縁部片が1点出土している。

41号周溝墓 西北隅の一部を検出した。周溝は1.5～1.6m、深さ0.2～0.35mで、遺物は検出されなかった。

42号周溝墓 東南隅にあって幅0.8m、深さ0.2mを測る周溝の一部を検出した。壺の口縁部片

が1点出土している。

43号周溝墓 屈出地の一部が農道をはさんで南側へ少し拡がっていたため、幅2m、長さ15mのトレンチを設けて調査を実施した。トレンチ中央部で幅3.5～5.5m、深さ0.2mの溝を検出した。北側の周溝墓群とはほぼ同じ方向性を示しているところから周溝墓であろう。遺物は検出されなかつた。

遺 物（図版第38～41）

各方形周溝墓の周溝内から供献土器が検出されていて、壺・甕が中心である。いずれも最内第Ⅱ様式期に属する特徴をもっている。胎土、色調はこれまで周辺部で出土している弥生式土器と同様で、淡黄褐色でやや粗い。

34号周溝墓出土の壺（3）は頸部に直線文を5段重ね、胴部に波状文を3段重ねている。他の壺（1・2）は口縁部と底部しか復原できなかった。甕（4）は口縁下から粗い縦方向の刷毛目を施し、外面にスヌが付着する。35号周溝墓出土の壺には大小ある。（5）は頸部下位から胴部にかけて4段の直線文と1段の波状文を施す。底部には木葉痕がある（15～17）。（6）は横描文は施されていない。甕（8）は小さくスヌが付着する。

36号周溝墓出土の壺も大小ある。（10）は口縁のみ出土し頸部に5段の横描文が施され、下から二段目が波状文である。（7）は口縁部を欠き、横描文は施されていない。甕（9）の底部には木葉痕があり、スヌが付着する。

38号周溝墓出土の壺は大型で口径30～40cmを測る。（11）は頸部から胴部にかけて、3本の横描直線文を24段施している。（18）も頸部に直線文を施している。甕（12）もやや大型で底部に木葉痕があり、スヌが付着する。鉢（13）は台付で口縁はゆるく外反する。39号周溝墓出土の壺（14）は大型で頸部から胴部まで14段の横描文を施している。下から3段目が彫刻文で、他は直線文である。他に口縁部の破片（21・22）が出土している。

40号周溝墓出土の破片は大型の壺の口縁部（18）で、端部外面に2段の竹管文を施す。42号周溝墓出土の破片は大型の壺口縁部（20）で、端部外面に波状文を施す。他に灰色砂礫や褐色土から第Ⅱ様式土器の破片などが出土しているが少々である。

今回の調査では、10基の方形周溝墓が検出された。時期は第Ⅱ様式期で、これまでの調査で検出されたものと同時期である。合計すると70基に達するが、その範囲は当調査区東側を南北に走る市道より東へは拡がっていないようである。また、南側の阪急高架工事に伴う調査でも遺構・遺物が検出されていないため、南限もほぼ推定できる。しかし西側へは、昭和57年度調査のEトレンチにおいて4基が、昭和54年度調査の京大農場東南隅でも1基が検出されていて、かなり拡がる可能性がある。当該地と57年度調査のEトレンチの4基は同一グループと考えられるが、47年度調査の16基とは距離も130m以上あって、北・東側には方形周溝墓が検出されていないことからみて、グループを異にすると考えられ、第Ⅱ様式期の墓域のグループ分けができるようである。ただし、54年度調査分と57年度の国鉄線路沿いの1基は距離的に少々離れており、どのグループに属するかは今後の調査に期したい。（橋本）

VII 安満北遺跡

15. 安満北遺跡の調査

高槻市安満中の町 480 番地にあたり、小字名は猪ノ口と称する。現状は宅地である。

安満北遺跡は、安満中の町を中心に拡がる弥生時代から古墳時代にかけての集落址で、標高は12~15mを測る。

今回の調査地は、本遺跡の東部に位置し、すぐ南側を旧西国街道が東西に走る。調査は、盛土が厚いため、北・南側の2ヶ所にトレントを設けて、層序の観察と造構の確認をおこなった。両トレントの層序はほぼ同じであり、盛土(0.4m)、旧耕土(0.2m)、床土(0.2m)、暗褐色土層(0.2m)〔遺物包含層〕、青灰色砂礫層〔地山〕となる。

出土遺物は、北側トレントの遺物包含層から布留式の壺片が數点出土した他、南側トレントの遺物包含層から弥生時代後期の壺・壺片が若干出土した。これらの中には特徴的な生駒西麓産と認められる壺片がある。

造構は南側トレントの西端で深さ0.1mの浅い落ち込みを1ヶ所検出した。落ち込みの規模および性格等については、調査トレントが限られたことから、明らかでない。

安満北遺跡の調査については、これまで数回おこなわれているが、いずれも周辺部の開発に伴うもので、明確な造構はまだ検出されていない。この調査例も含め今後に期したい。(大船)



挿図8 安満北遺跡の調査位置図

VIII 芝生遺跡

16. 芝生遺跡の調査

高槻市芝生町4丁目372-1番地にあたり、小字名は流・河原と称する。市立体育馆建築工事に際し、弥生土器が発見されたため、緊急調査を実施した。調査は体育馆建設予定地内に4ヶ所のトレントを設定し、実施した。Aトレントは10m四方のもので、遺跡発見の端緒となった南西部の浄化槽付近に設定した。B~Dの各トレントは遺跡の範囲をみるためにもので、それぞれ敷地の東部・北西隅部・北東隅部に3m四方のものを設けた。

造構(図版第42・62)

Aトレント

層序は盛土(1.6m)、耕土・床土(0.2m)、整地層(0.36m)、青灰色粘土層(0.54m)、暗青灰色粘土層(0.2m)、黒灰色粘土層〔遺物包含層〕(0.27m)、暗青灰色粘土層〔地山〕。

以下も同じ)(0.38m)、暗灰色粘土層(0.2m)、暗青緑灰色粘土層(0.82m)、黒色粘土層(0.4m)、暗灰色砂層(0.3m)、黒灰色砂層(0.5m)となる。このうち第4層の青灰色粘土層からは瓦器の細片が検出され、第6層の黒灰色粘土層は弥生時代の包含層、第7層の暗青緑灰色粘土層上面は弥生時代の遺構面である。第7層上面での標高は約4.5mである。なお地山となる暗青灰色粘土層以下の4層はいずれも堆積層である。検出した遺構は、弥生時代中期前半のピット4個、後期前半の土器群である。ピット1は径約0.5m、深さ0.35mを測る。ピット2は長径0.35m、短径0.23mの隋円形を呈し、深さ0.55mを測

る。ピット3は径0.25m、深さ0.15mを測り、断面は鉢状を呈している。ピット4は長径0.65m、短径0.5m、深さ0.23mを測る土壤状のもので、ピット内から第II様式期の甕片が検出されている。土器群はトレンチの東部一帯に拡がっていて、出土状況からは、地山上に沼沢地がある程度形成されてのち、土器が投棄されていることがわかる。検出した範囲は南北8m、東西4mを測るが、調査区域外に拡がるのは確実で、土器群の西隅を調査したことになる。

Bトレンチの層序は盛土(1.8m)、耕土・床土(0.28m)、暗灰色粘土層(0.4m)、暗褐色土層(遺物包含層)(0.5m)、地山となる。このうち第4層の暗褐色土層は弥生時代後期の良好な包含層で、地山は標高4.7mを測る。トレンチが狭小なため明確な遺構は検出されなかったが、厚さ0.5mにおよぶ遺物包含層の検出と多くの土器が出土したことにより、その存在は確実視される。とくに包含層は良好で、Aトレンチのそれが酸性のいわゆる帶水性の状況を示しているのに対し、このトレンチでは酸化が進んでおり、居住地区の近く、あるいはそのものに含まれると考えられる。

C・Dトレンチの層序はいずれも盛土(1.3m)、耕土・床土(0.28m)、暗黄灰色粘土層(0.7m)、地山となり、遺物包含層や遺構は検出されなかった。

遺 物 (図版第43~48)

弥生土器が2000点(破片)ばかり出土している。時期的には弥生時代中期初頭(第II様式)と後期前半のものがある。前者はAトレンチの遺構に伴ったものと後期の包含層から出土したもので、他に採取資料が1点ある。後者は同じくAトレンチの土器群と包含層、そしてBトレンチの包含層から出土している。

第II様式の土器は16点認められるが、全形を知るものはない。壺は底部と胴部の破片が12点あるが、口縁部はない。壺は、口縁部、底部、胴部の各破片を計4点検出している。当該期の土器はいずれも在地産と考えられるものばかりである。

後期の土器は壺・鉢・高杯・器台・甕がある。以下器種ごとに概述する。



図9 芝生遺跡の調査位置図

壺は広口壺、長頸壺、無頸壺がある。このうち広口壺がもっとも多い。1は上方に立ちあがる頸部に大きく外反する口縁部のつるもので、口縁端部は下方へ肥厚し、端面には2条～3条の沈線様の擬凹線をめぐらしている。頸部と肩部の境には刻目を有する凸帯を貼りつけている。色調はややくすんだ灰黄色を呈し、胎土は砂粒が目立つ。在地産と考えられるが、遺存状態はあまりよくない。44も同様のものであろう。2は球形の体部に直立した頸部と外反する口縁部を有する。口縁端部は下方へわずかに突出する。色調、胎土ともに1と似る。40・41などは2と同じ形態を示すものであろう。3は体部下半のみの遺存である。突出した底部から外反気味にひろがる胴部下半に、屈曲部を介して立ちあがる頸部がとりつくものである。色調は暗茶褐色で、角閃石を含む。河内産。長頸壺は口頸部に長短あるが、一括して扱う。4は唯一の完形品で、突出した底部に縦長球形の体部を有し、口頸部は垂直に立ちあがったのち外反しておわる。胎土、色調ともに1と同じ。他に体部上半と頸部が遺存するものや口頸部のみ遺存するものが若干ある。なかでも5は口頸部高16.8cmを測る大型品である。胎土、色調はいずれも4と大同小異で在地産と考えられる。無頸壺は1点検出している。6はやや胴の張った球形の体部に、中間みの突出した底部のつるもので、口縁部は体部上端をヨコナデするだけで整形している。在地産。なお他にも櫛描文・刺突列点文・貼付文のある壺片(図版第46-b)を若干みるが、いずれも形態を復するまでには至らない。

鉢は2点の完形品をみる。7は把手付きの大形品で、半球状の体部に短く外反する口縁部を有する。口縁端は下方に突出して面をもち、壺1と同様2条の擬凹線をほどこしている。把手は逆U字形のものを左右に1対貼り付けている。在地産。8は台付のものである。台部は外開きに下方へのび、中位に4孔を穿っている。鉢部は扁球状の体部に受口状の口縁部がつく。体部上半には櫛描直線文と波状文の組み合せた文様帶がみられ、口縁部の立ちあがり部外面にも櫛描波状文を施している。色調は暗茶褐色で、角閃石を含む。河内産。

高杯は柱状部の数量から判断して20点余を検出したが、全形に復元できたものは2点と少ない。杯部の形状から3種に大別できる。1つは9～11に示されるごとく、皿状の底部に屈曲して立ちあがる口縁部がつくものである。口縁部が外反するが、その度合はさほど強くならない。いま一つは12に典型的にみるように、鉢状の杯部を有するもので、口縁部はゆるく外反している。口縁部の形状には2種類あり、12のように肥厚しないものと、13・54～57のように下方へ粘土帯を貼り付け肥厚させたものがある。後者には端面のみに櫛描波状文を施す13と口縁上端部にも波状文を施す56・57の2種類がみられる。また浅碗状の杯部を有する高杯片58が1点出土している。脚部では、単純にラッパ状に開く14・15と柱状部と裾部が明瞭に区分される11がある。さらに59・60などわずかにしか遺存していないが、筒状の柱状部に凸帯を付した裾部を有する高杯の存在も考えられる。以上の高杯はいずれも在地産と考えられるものであるが、河内産の76が1点Aトレンチから出土している。

器台は数点検出しているが、台部をみるものはない。89の筒部の復元径は約8cmで、88はほぼ同等、46はやや小さ目であろう。穿孔は88と89が中位の1段であるのに、46は小孔を上下2段に配している。いずれも在地産と思われる。

壺はもっとも出土点数の多いもので、大形・中形・小形の別がある。大形のものはまれで、16も

上半部を欠失している。突出した底部に丈高の体部を有しており、外面は全面刷毛調整、内面も刷毛調整であるが深く削り取るようにほどこされている。したがって大きさの割には器壁は薄くなっている。中形のものは口縁部の形態によって2種に分けられる。1つは17~19・66のように屈曲して外反し、断面が矩形を呈するもので、肩部に調査工具による刺突列点文を配するのが目立つ。いずれもタタキ整形後に刷毛調整・ナデ調整を施している。いま一つは受口状の口縁を有する20で、やはり肩部に列点文を配している。体部はタタキ整形後にナデ調整している。小形のものは口縁部の形状が多様で、面をもつ65、丸くおさめる22、受口状の21、端部を上方へつまみだした72、短くて面をもつ71、同じく尖り気味の68・70などがある。このうち復元できたのは21と22の2点である。22は突出した底部に縦長の体部を有し、口縁は丸味を帯びた矩形を呈する。体部外面は全面ナデ調整を施していて、タタキ目は見い出せない。内面は下半を軽くハラ削りし、上半はナデ調整している。21は受口状口縁を有するもので、やや突出した底部と球形の体部を有する。体部は全面にわたって細かな刷毛調整をおこない、内面はナデ調整している。口縁部はさきの台付鉢とは異なり、上縁部の外反度は強い。墻はおむね在地産のものであるが、18・19・21は角閃石を含む河内産のものである。またこの3者のなかで、他の破片をも含めてみても、中形品に河内産のしめる割合が高いようである。

小 結

中期初頭の遺構はAトレンチで検出した若干のピット類だけであるが、ピット3、4の形状をみると、近くに集落の存在が考えられる。一方当該期の遺物の出土状況をみると、いずれも破片でまとまっておらず、また包含層の形成もみられないことから、水田地域もしくは墓域の一画にあたるのかも知れない。

後期の遺構はAトレンチで土器群を検出したほか、Bトレンチで良好な遺物包含層を検出している。土器群での出土状況をみると、同一個体の土器片はあまりかけ離れたところには存在せず、近くから投棄されたものが、2次的に移動することなく埋没したと考えられる。すなわち、土器群は廃棄場としての土器窓の性格をもつものであったろう。A・Bトレンチでの遺構面は0.2mの比高差でもってBトレンチが高くなっていることと、土器群の性格からすると、当該期の集落は、Aトレンチ辺りを集落の外縁部として、東側のやや高くなったところに居住区があったものと考えられる。Bトレンチは狭小であるために明確な遺構は検出できなかったが、この周囲に居住区が拡がっているのは確定である。しかも周辺の地勢をみると、本調査区の東側にある現在の芝生の集落を中心とする半径約200mの範囲が若干高くなってしまい、芝生遺跡の集落はより東側に拡がる可能性がある。

遺物は1点の瓦器片をのぞけばすべて弥生土器で、第II様式のものと第V様式のものがある。前者はいずれも破片であり、特筆すべきものはないが、芝生遺跡の初源をみるうえで重要な資料となる。遺物量は少ないが、全体の傾向として安満遺跡の様相に近いと思われ、実体的な究明は今後の調査に期待される。対して後期の土器はトレンチ調査としては質量ともに豊富で、良好な一括資料といふ。広口壺の3は後期でも古相を示し、長頸壺も大形品を含んでおり、三島では前半期に比定される。高杯は中実の脚部ではなく、10などの立ちあがり部の形状は後半期にはみられないも

のである。反面11の口縁部の形状はやや新しい様相をもつ。なお、12・13のタイプの高杯ははじめての検出例であり、他地域を含めてもあまり類例をみないものである。台付鉢の可能性もあり今後に期したい。鉢は、特異なものが目立ち、通有な小型の直口鉢がみられず奇異に感じられる。7は恩智遺跡出土品に似たものがある。縁はタタキ整形後に刷毛調整を施すものが多く、少なくとも全出土量の半数以上は刷毛目が顕著にみられる。形態的には大形品、中形品がより古相を示しており、復すれば胸部上位の張った縦長の体部になり、口縁部の形状もそれにふさわしい。なかでも20は西ノ辻I式にも類例が求められるものである。以上のことから判断すれば、Aトレンチの土器群の時期はおおむね後期前半の新相ということになろうか。三島ではこの時期に安満遺跡のA5-2周溝墓の資料があるが、長頸壺のあり方や高杯の形状をみると、今回の土器群の資料がやや先行すると考えられる。

ところで後期の土器のなかにはたくさんの河内産のものがみられ、高槻の他遺跡の諸例と比べても断然に多い。これは芝生遺跡の地理的位置が大きく関わってのことであろうが、器種としては壺・高杯・鉢・壺がみられ、個体数も15点以上ある。まだ整理を完全におえていないので確かではないが、出土点数の5%程度は河内産の土器とみてよいであろう。これは高槻の諸遺跡の事例が1%にも満たないのに比べるとなお明らかである。

芝生遺跡はこれまでまったく認識されていなかったものであり、今回の発見によって市域南部にも集落遺跡の存在が確かめられたわけで、その意義は大きい。しかも出土遺物には弥生時代中期初頭と後期のものがあり、今後の調査如何によっては拠点集落になる可能性もでてくる。集落の立地としては、芦川が形成した自然堤防上あるいは微高地が考えられる。三島地方で同様の傾向を示す遺跡としては安威川下流域にある茨木市の日垣遺跡があげられよう。いまのところ芝生遺跡・日垣遺跡とも本格的な発掘調査がおこなわれておらず、その実体は不明といわざるを得ないが、今後三島地域の弥生社会を論じるにあたって看過できない重要な遺跡となるであろう。(森田)

〔資料〕 芝生遺跡の花粉分析

芝生遺跡の発掘調査に際して、その自然環境を推定するために花粉分析をおこなったので報告する。

試料は8試料あり、試料番号・帰属土層(年代)は図版第64に示した通りである。

1. 分析方法

試料(約200g～300g)をビロリン酸ナトリウム液に24時間浸す→傾斜法による水洗(約2ヶ月)→振動法で植物性遺物を濃縮→塩化亜鉛の飽和溶液による比重分離→水洗→氷酢酸で洗う→混酸(無水酢酸9+濃硫酸1)を加え80°Cで1分間加温→氷酢酸で洗う→水洗→グリセリンゼリーで封じプレパラート作成。

検鏡同定は400倍でおこない、各試料について樹木花粉(AP)が400をこえるまで同定計数し、属・種ごとにまとめ整理する。同定不可能なものやまぎらわしいものは計数せず同定確実なものについてのみ計数した。同定された花粉は樹木・草本ごとに百分率を出し一覧表にした。

試料1～4は花粉の検出状態がよく百分率表示が可能であったが、試料5～8は検出量少なく

実数のみを記すにとどめた。

2. 結果(図版第49~52)

検出された花粉をまとめたのが第1表(樹木)・第2表(草本)である。また、樹木花粉(AP)と草本花粉(NAP)の検出数の比(AP/NAP)は、①が2.5②が5.7③が3.8④が1.1となる。

科・属・種	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
イチヨウ属	2.3	0.9				(1)		
モミ・トウヒ属	1.9	7.4	33.8	6.9			(3)	
ツガ属		0.4	0.6					
カラマツ属				0.4				
マツ属	49.2	47.9	21.7	9.8				(1)
コウヤマキ属		0.2		1.3			(1)	
スギ	0.4	1.6	2.4	2.2				
セナギ科	0.4	0.7	0.6	10.7	(7)	(4)	(1)	
ヤマモモ属	1.6	1.8	1.2					
クルミ科	0.8			0.4	(3)	(1)	(2)	
クマシデ属	2.3	0.2	0.6	0.4				
ハシバミ属	2.3	0.7	0.4	2.6	(1)			(1)
シラカンバ属	0.4	0.4	0.4					
ハンノキ属	5.1	0.9	0.8	1.3				
ブナ属	1.2	0.4	0.6					
コナラ属	5.9	6.9	6.7	17.5	(19)	(13)	(15)	(2)
アカガシ属	19.1	17.4	13.9	14.5	(13)	(5)	(8)	
クリ・シイノキ属	4.7	11.1	15.7	29.5	(8)	(2)		
ニレ・ケヤキ属	1.2	0.9	0.4	0.4	(1)			
タブノキ属				0.4				
サクラ属	0.4			0.4				
マメ科				1.3				(2)
アオイ科								
ジンチョウゲ属	0.4							
ツツジ属	0.4	0.2	0.2					
ヘクソカズラ属					(1)			

第1表 高槻市芝生遺跡花粉分析表(樹木)

科・属・種	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
イネ科(大型)	42.3	24.0	14.1	27.2	(29)	(8)	(2)	(9)
〃(小型)	29.8	13.9	8.5	4.9	(5)	(3)	(1)	
ソバ科	1.9					(3)	(1)	
ウリ科		1.3	0.7					
アブラナ科		3.8	4.2	3.4	(4)	(1)	(3)	
ハス				0.5		(1)		
ヨモギ	7.6	22.8	7.1	13.1	(12)	(2)	(3)	
キク科				11.7	(3)	(4)	(3)	
セリ科	4.8	6.3	2.8	12.6	(1)	(1)	(10)	
ナデシコ科	1.0	5.1	1.4	1.9	(1)	(1)		
タデ科	1.0	7.6	52.1	14.1	(10)	(23)	(13)	
ギシギシ			2.1	1.4				
カナムグラ	8.6				(1)	(1)		
オキナグサ	1.0	2.5	2.8	2.4	(1)	(4)	(4)	
アカザ科	1.0	5.1		4.9	(1)			
アリノトウグサ	1.0		0.7					
オナモミ		3.8						
カヤツリグサ科		3.8	3.5	1.9	(1)			
アケビ						(3)	(3)	
ウマノスズクサ科							(1)	

第2表 高麗芝生遺跡花粉分析表(草本)

(注) 試料①～④は百分率(%)、⑤～⑧は検出数を示す。

イネ科大型は48ミクロン以上、小型は48ミクロン未満の花粉。

3. まとめ

試料1

(A P) : マツ属が全樹木花粉の約半数を占め、次いでカシ類では常緑性のアカガシ亜属が落葉性のコナラ亜属の3倍以上検出されている。その他ハンノキ属・シイノキ属と共に5%ぐらい検出されている。

(N A P) : 大型イネ科が40%以上で、イネと思われるものが多く検出されている。またソバ花粉がわずかであるがみられる。

試料2

(A P) : マツ属が約半分の48%で、次いでカシ類の24%となっているがここでもカシ類は常緑性のものが落葉性の2.5倍と常緑性アカガシ亜属花粉が多い。シイノキ属11% モミ・トウヒ属7%がこれに次いで検出されている。

(N A P) : 大型イネ科が24%で多く、次いでヨモギの22.8%となっている。小型イネ科も14%、タデ科7.6%、セリ科6.3%と検出されている。またキク科のオナモミが少しみられる。

試料3

(A P) : モミ・トウヒ属が多く34%でマツ属22%、カシ類28.5%、シイノキ属15.8%となってい。カシ類では常緑性が落葉性の約2倍である。

(N A P) : タデ科がきわめて多く52%となっている。大型イネ科は14%と数字の上では少なくなっているがイネ様プラントオバール(珪酸体)が検出されているのでイネが栽培されていたと考えられる。

試料4

(A P) : カシ類が32%、シイノキ属が30%と多く、マツ属は10%と減少している。カシ類では常緑性と落葉性がほとんど同数であるが落葉性の方が多くなっている。ヤナギ属が11%とマツ属より多い。

(N A P) : 大型イネ科が27%と多く、タデ科・セリ科などの水辺の草本がこれに次ぎ14%・13%みられる。またヨモギ、キク科も同程度検出されているが、キク科はほとんどがキク亜科である。この試料からハスと思われる花粉も検出された。

試料5~8

(A P) : 検出数が少ないので断定的なことはいえないとしても全般にカシ類が多い傾向で、中でも落葉性の方が常緑性より検出数は人である。また、クルミ属・ヤナギ属が検出されている。

(N A P) : イネ科・タデ科・セリ科・キク科・ヨモギ・オキナグサ等がみられる。試料6・7からアケビ・ソバが検出されている。

以上が各試料から検出された花粉分析結果である。以下若干の事項について考察する。

(1) 照葉樹林よりマツ主体の混交林へ

試料4から1へ、すなわち弥生時代後期と中世とでは植生がどのように違うのかをみてみると、数値的には中世にはマツの増加が目立っている。一方カシ類のきわだった変化はみられない。しかし、マツ属とカシ類の比率(マツ/カシ)を求めてみると、①が2.42、②が1.97、③が1.05、

④が0.30となる。つまり時代が降るとともにマツ属のしめる割合が大きくなっている。さらに、カシ類にシイノキ属を加えたものとマツ属の比率(マツ/カシ・シイ)を求めるとき、①は1.66、②は1.35、③は0.60、④は0.16となる。

カシ類・シイノキ属を主体とする森林形態は照葉樹林である。試料④の弥生時代後期における森林形態は明らかに照葉樹林であるが、中世になるとマツ属の増大とともにその形態もくすれ圧倒的にマツ属が優位となりマツ主体の混交林になっていることがうかがい知れよう。

(2) 気候は次第に温暖に

植生からみた気候の変化、特に気温の変化についてみてみると、カシ類には常緑性のアカガシ亜属と落葉性のコナラ亜属とに分けられる。常緑性のアカガシ亜属と落葉性のコナラ亜属の比(常緑/落葉)を求めてみると、①は3.27、②は2.52、③は2.06、④は0.83となる。

弥生時代後期と中世を比べると落葉性優位の環境が常緑性優位の環境へ変化した様子がわかる。落葉性コナラ亜属を主体とする森林は関東地方の武藏野にみられる椎木林が代表的なものであろう。一方常緑性アカガシ亜属を主体とする森林は照葉樹林で西日本に広くみられる形態である。関東地方と西日本の平均気温をくらべてみると2~3度関東地方の方が低い。また、植物の垂直分布状態からみても、常緑性カシ類は山麓付近に生育するが落葉性カシ類はそれより高い所にある。このことから常緑性アカガシ亜属と落葉性コナラ亜属の関係を検討すると弥生時代後期以降次第に気温が高くなってきたのではないかと考えられる。

(3) スギの減少 — 森林破壊

スギは湿気のある日陰を好み酸性土壌に弱い樹種でやせ地、乾燥地では生育不能である。これに対してマツ属・ハンノキ属等は酸性土壌に対して抵抗力が強く、しかもマツやヤマハンノキ等は乾燥にも耐えうる樹種である。弥生時代後期以降これらの樹種をみると、スギは減少しマツ・ハンノキは増加している。比較的肥沃で繁った林地のため湿気も充分にあったスギ林が破壊され、表土の有機養分が流失しやせ地と化し、更に林冠が開け日射によって乾燥地となつた為マツ林に変わっていったのではなかろうか。森林破壊の一例であろう。

(4) シラカンバ属について

試料①~④で検出されたシラカンバ属は形態等よりみるとミズメであろうと思われる。

(5) 地山について — 芥川の氾濫

地山からの検出花粉数はきわめて少ないが各層からカシ類・大型イネ科がでている。中でも大型イネ科はイネ栽培と結びつくので軽々しく取扱うわけにはいかないが無視することもできない。これらは他の場所から土砂と共に流れ来て堆積したものと考えられないこともない。弥生時代中期以前に近くの芥川の氾濫により上流の土砂が流れてきてこのあたりに堆積したと考えられる。弥生時代の前期あるいは中期初めに土砂が堆積したのであればその中に大型イネ科があつても不思議ではない。地山はそのような河川の氾濫によるものである。したがって花粉含有量も必然的に少ないわけであり、堆積層であるためいろいろの時代の花粉が含まれている。

(6) 試料⑤について

地山の各土層のうち試料⑤は弥生時代中期の遺構面形成土層にあたる。樹木花粉の検出量が少

ないとはいって、弥生時代後期の場合とよく似た状態で、落葉性コナラ亜属が最も多く、ついで常緑性アカガシ亜属・ヤナギ属となる。したがって弥生時代後期の前段階の植生と推定されよう。草本では大型イネ科が多く、近くに水田があったのであろう。ヤナギ属・タケ科・セリ科等湿地に生育する植物とあわせ考えると、氾濫による堆積層の最上部である資料⑥の上層はまだかなり湿地帯あり、そこにイネを栽培していたと思われる。

(7) 試料⑥のモミ、トウヒについて

モミ・トウヒ属の花粉が異常に高くなっている。ツガ属の花粉は試料②の場合と大差ない。もし近くの森林を構成する樹種に変化があってモミ・トウヒ属が多くなっているのであれば当然ツガ属の花粉も増加するはずであるがその傾向はみられない。すぐ近くにモミ属の木があつたことによるのかもしれない。さらに資料を収集して検討する必要があつる。(徳丸)

IX まとめ

島上郡衙跡における今年度の調査は合計8ヶ所で実施された。まとまった面積を調査したのは7-I・M、17-A・B地区と34-A・B・C・D地区である。7-I・M、17-A・B地区では古墳時代初頭の竪穴式住居を多数検出することができ、阿久刀神社周辺部の様子をかなり解明することができた。すなわち、弥生時代中期には墓域であったが、後期に集落が形成され古墳時代に入ると大集落となる。これまでに、検出された竪穴式住居だけでも約70棟にのぼり、島上郡衙跡全体では100棟をはるかに超える。時期別や重複も考慮しなければならないが、この時期の集落としては畿内最大級であると言っても過言ではない。とくに、阿久刀神社周辺部の場合、背後に存在する弁天山古墳群との密切な関係が想像される。今回、検出された集落の発展と弁天山古墳の成立は期をひとつにしており、弁天山古墳群の被葬者の本拠地をここに求めることができよう。また、周辺では奈良・平安時代の遺物に縄文鏡や越州青磁など特異なものが出土し、奈良時代以降も郡司クラスの居住が在ったとみられ、歴代の当地域の首長層の本拠地であったらしい。

一方、KH1などから多量の土器類を検出した。弥生時代末から古墳時代初頭にかけてとみられるが、他地域の研究動向とも考えあわせて詳細に検討を行ないたい。また、竪穴式住居の内部空間の利用についても新たな資料を得た。とくにKH5の場合は、八尾市美園遺跡出土の埴輪例を参考として、造りつけの寝台を想定した。KH6、KH9やKH16でも内部の間支切りを検出しており、あわせて今後の検討課題である。

このように、郡衙成立以前の歴史的環境を具体的に知る資料を多く得たが、34-A・B・C・D地区の調査ではほとんど遺構・遺物が検出されず、郡衙や寺の規模を知る手かかりとなった。

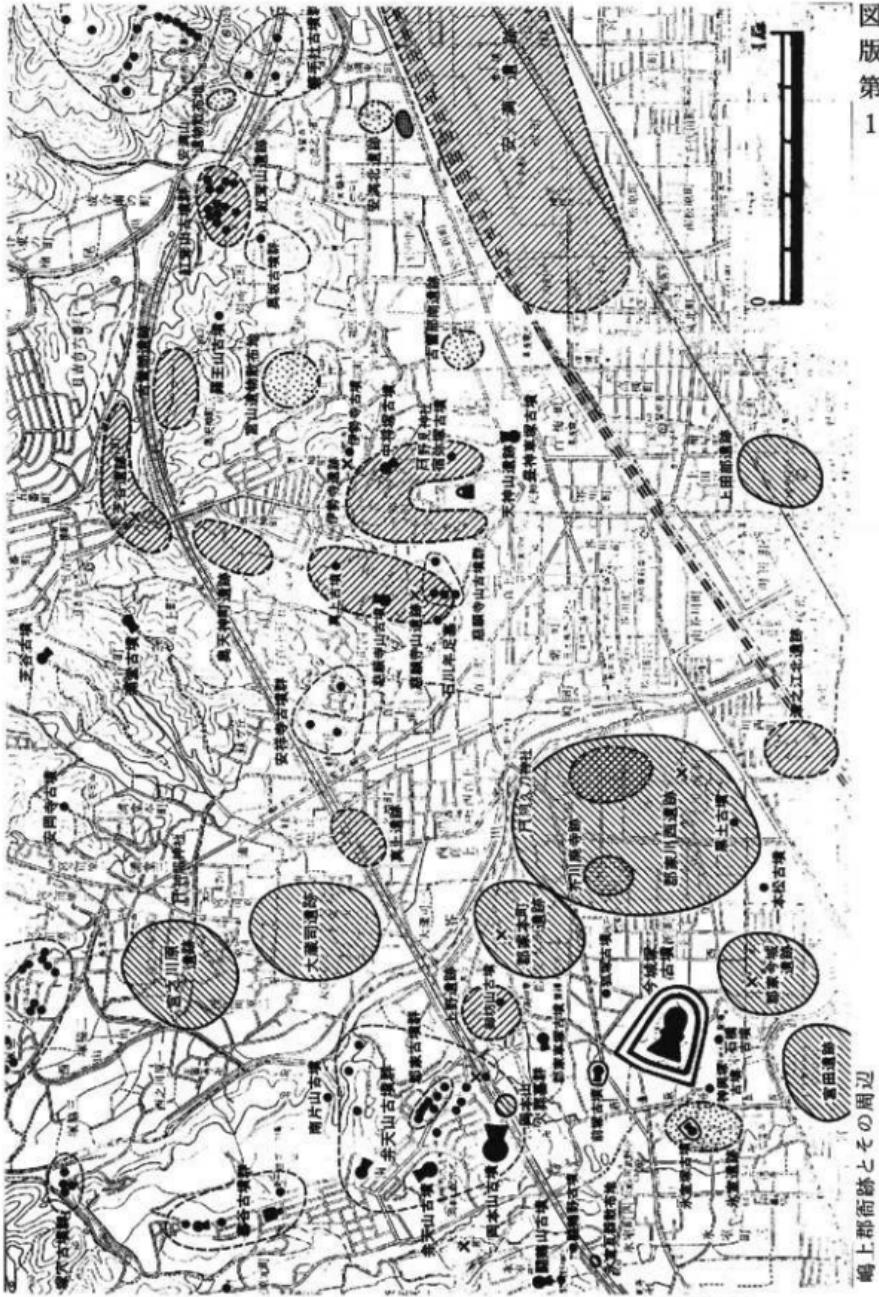
島上郡衙跡遺跡の調査では、芥川遺跡と芝生遺跡が新たに発見された。両遺跡は芥川が形成した自然堤防上あるいは微高地に立地している。また、出土土器も弥生時代後期を中心としているが、弥生中期の土器も若干含んでいる。弥生中期に、芥川氾濫原を開拓していくものとみられるが、とくに芝生遺跡の場合、これまで周辺にはまったく遺跡の存在が知られておらず、高槻市南

部の歴史を知るうえで重要である。

安満遺跡では、東部の弥生時代中期の方形周溝墓群の調査が進んでいる。周溝墓はいずれも第Ⅱ様式期であり、この時期の集落の発展が想像できる。前述の芥川・芝生遺跡など、この時期に新たに成立する集落とあわせて弥生時代が中期に入って発展するという一般的な状況を具体的に知ることができる。

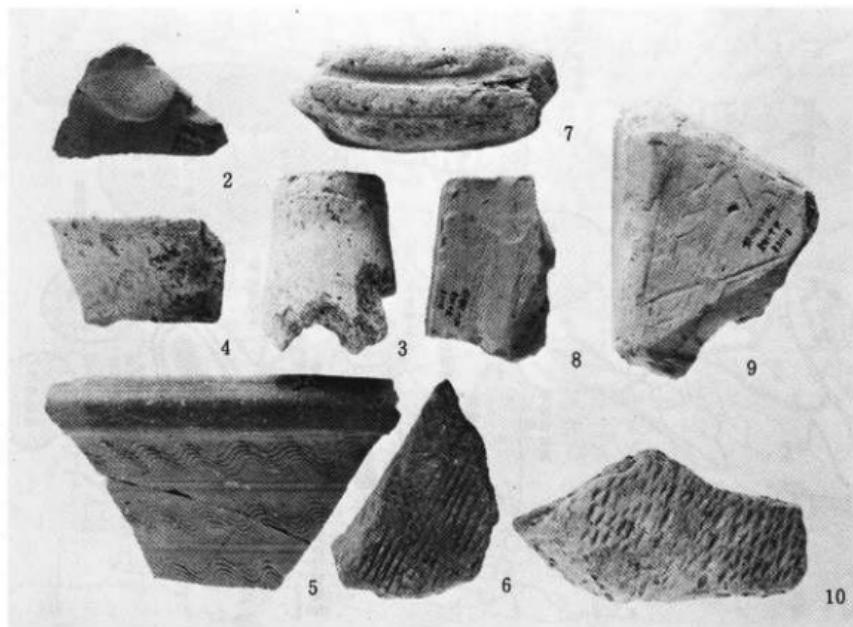
他に、水室塚古墳、富田遺跡などでも調査が実施されている。狭小な調査範囲であるが、資料の蓄積によって、遺跡の概要がかなり判るようになってきた。(橋本)

図 版





a. 34-A・B・C・D地区(西側から) (1)C = 15.0



b. 34-A・B・C・D地区 包含層(1~10)

約1/2



a. 38-I 地区（北側から）



b. 65-C・G 地区（北側から）



a. 7-1・M, 17-A・B地区 西調査区(南側から)



b. 7-1・M, 17-A・B地区 南・東調査区(東側から)



a. 7-I・M, 17-A・B地区 土壌墓D1, 銚棺墓K1・K2(北側から)



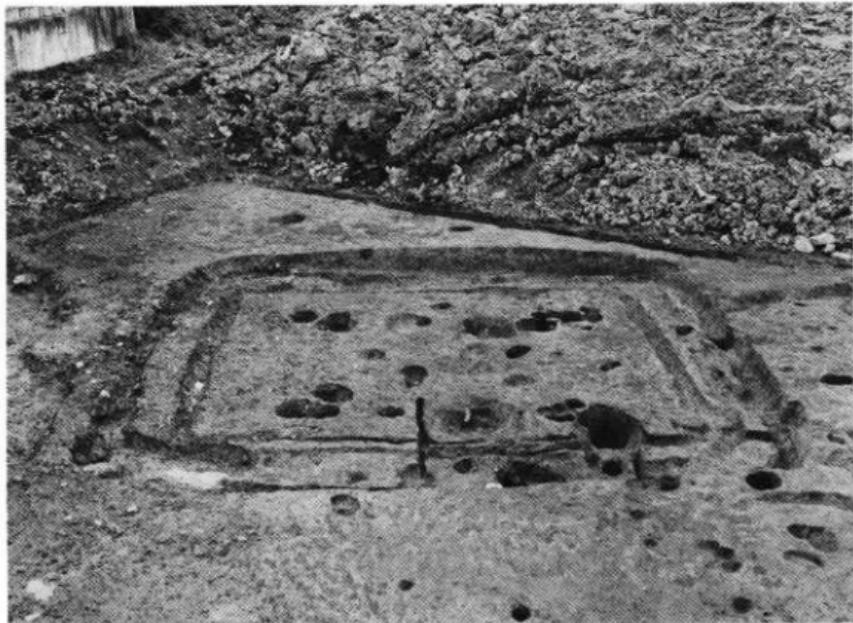
b. 7-I・M, 17-A・B地区 土壌墓群(東側から)



a. 7 - I • M , 17 - A • B 地区 壁穴式住居 KH1 • KH2 (東側から)



b. 7 - I • M , 17 - A • B 地区 壁穴式住居 KH5 • KH6 (北側から)



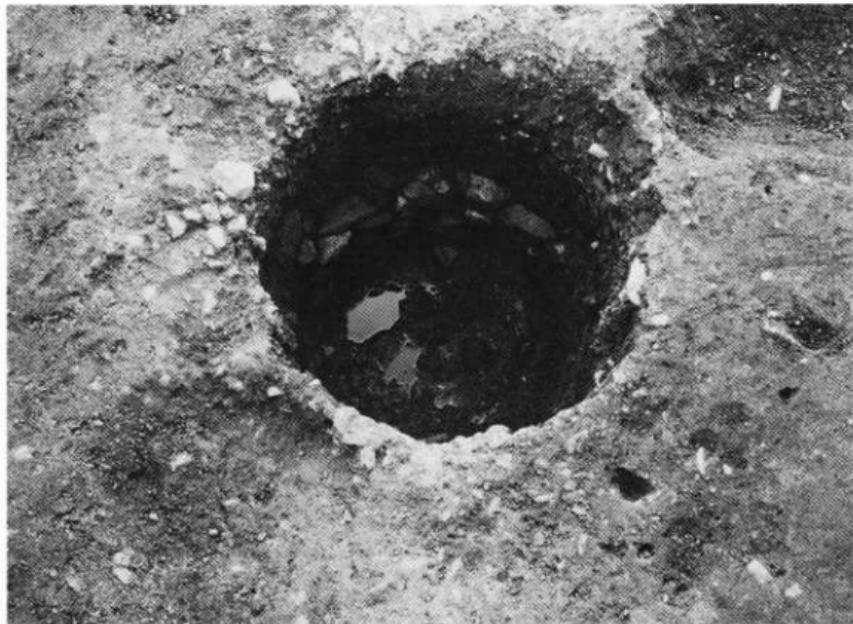
a. 7-I・M, 17-A・B地区 竪穴式住居KH9(南側から)



b. 7-I・M, 17-A・B地区 竪穴式住居KH16(西側から)



a. 7-I・M, 17-A・B地区 挖立柱建物 K H 19 (西から)



b. 7-I・M, 17-A・B地区 井戸 2 (北側から)



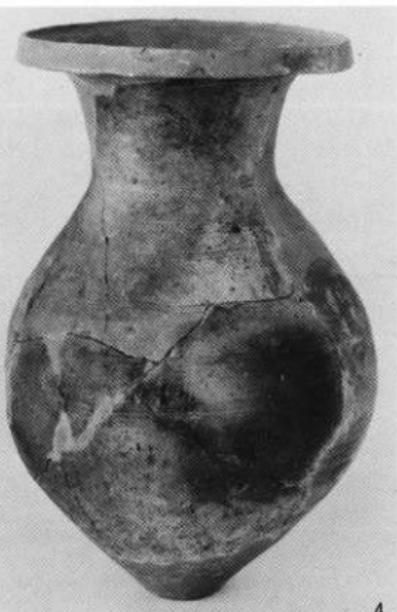
1



2



3



4

7-I・M, 17-A・B地区 D1(1・2), D10(3), D26(4)

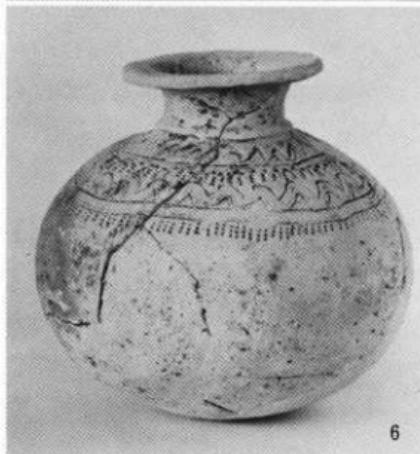
(1) C = 9.5, (2) C = 11.5, (3) h = 21.8, (4) C = 17.5



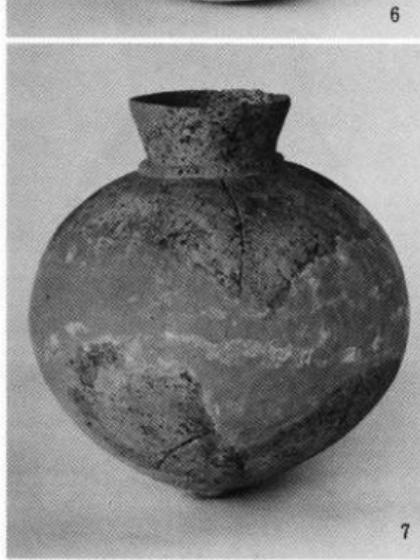
5



8



6



7



9

7 - I • M , 17 - A • B 地区 KH 1 土器群 (5 ~ 9)

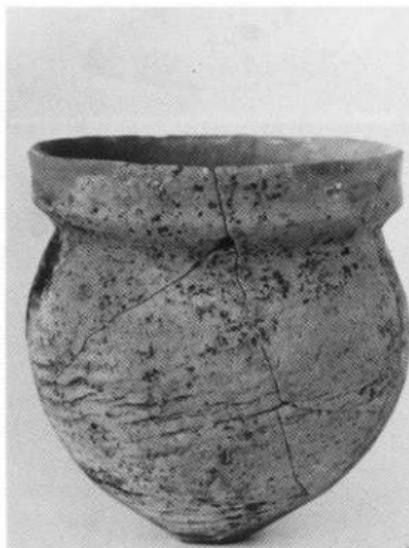
(5) C = 13.0 ,(6) C = 12.8 ,(7) h = 27.8 ,(8) h = 15.8 ,(9) h = 15.0



10



11



12



13

7-I・M, 17-A・B地区 KH1土器群(10・12・13), 包含層(11)
(10) h = 15.0, (11) h = 18.2, (12) h = 9.3, (13) h = 23.7



14



15



16



17



18



19



20

7-I・M, 17-A・B地区 KH1土器群(14~20)

(14) h = 13.3, (15) h = 15.5, (16) C = 21.5, (17) h = 13.7, (18) h = 11.3

(19) h = 12.4, (20) h = 12.0



21



22



23



24



25



26

7.-I・M, 17-A・B地区 KH1土壤群(21~26)

(21) h = 12.5, (22) h = 15.3, (23) h = 14.8, (24) h = 11.2, (25) h = 7.4, (26) h = 6.2



27



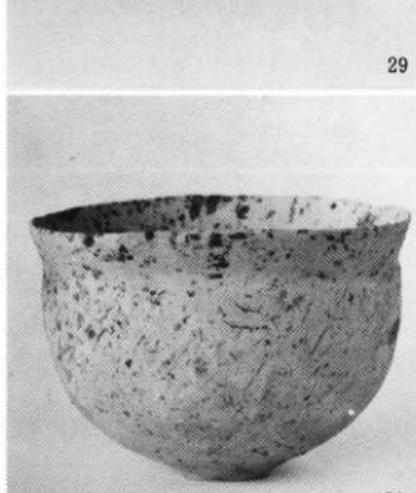
28



29



30



31



32

7 - I・M , 17 - A・B 地区 KH1 土器群 (27~32)

(27) h = 9.8 , (28) h = 8.5 , (29) h = 8.0 , (30) C = 10.0 , (31) h = 6.4 , (32) h = 12.0



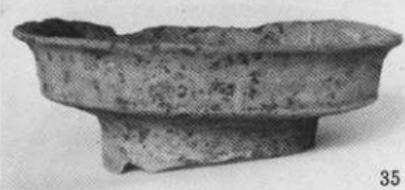
33



33'



34



35



36



37



38

7-I-M, 17-A-B地区 KH 1 (33), KH 4 (34), KH 5 (35~38)

(33) C = 15.3, (34) h = 28.0, (35) C = 20.0, (36) h = 7.1, (37) h = 7.3, (38) C = 9.5



39



40



41



42



43



44

7-I・M, 17-A・B地区 KH5土器群 (39~44)

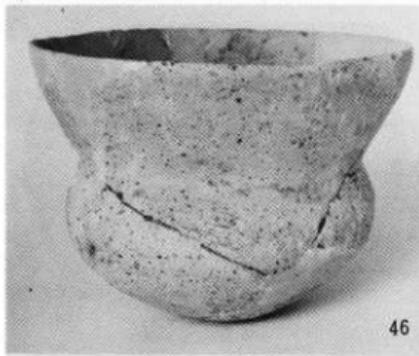
(39) h = 13.2, (40) h = 10.2, (41) h = 19.8, (42) h = 8.7, (43) h = 8.7, (44) h = 7.3



45



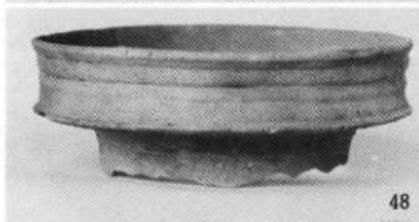
47



46



50



48



51

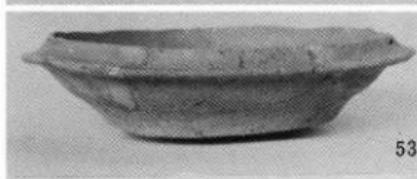
7-I-M, 17-A-B地区 KH 9土器群(45~49), KH 16(50), 包含層(51)
 (45) h = 7.0, (46) h = 7.4, (47) h = 8.8, (48) C = 19.0, (49) h = 14.4, (50) h = 8.0
 (51) h = 12.6



52



56



53



54



57



58



55



59

7-I・M, 17-A・B地区 溝1(52~55), 井戸1(58・59), 井戸2(56・57)

(52) C = 11.2, (53) C = 10.3, (54) h = 14.7, (55) C = 9.8, (56) C = 15.5, (57) C = 16.0

(58) C = 15.6, (59) C = 14.9



60



61



62



63



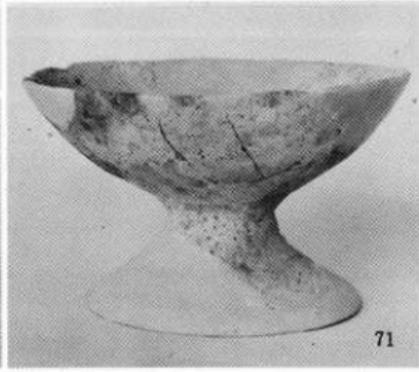
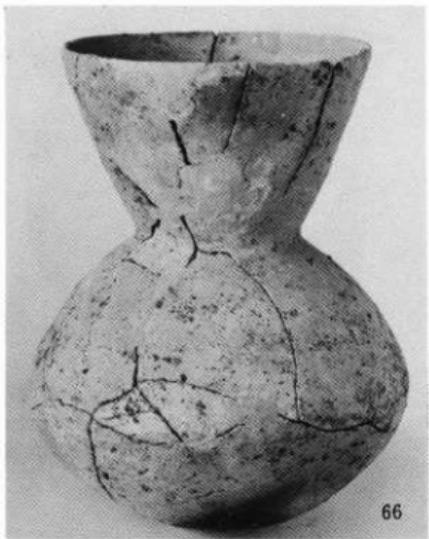
64



65

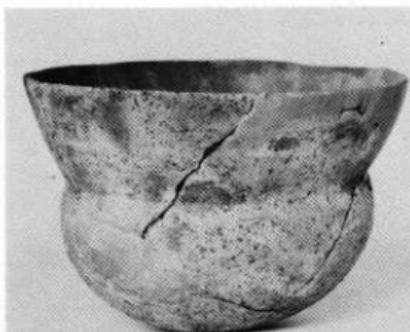
7-I・M, 17-A・B地区 包含層(60・62・65), KH I (61)

(60) h = 8.3, (61) h = 15.0, (62) h = 10.2, (63) h = 17.0, (65) C = 20.5



7-I·M, 17-A·B 地區 包含層 (66~71)

(66) $h = 16.2$, (67) $C = 16.5$, (68) $h = 25.5$, (69) $C = 14.0$, (70) $C = 17.5$, (71) $h = 7.5$



72



73



74



75



76



77

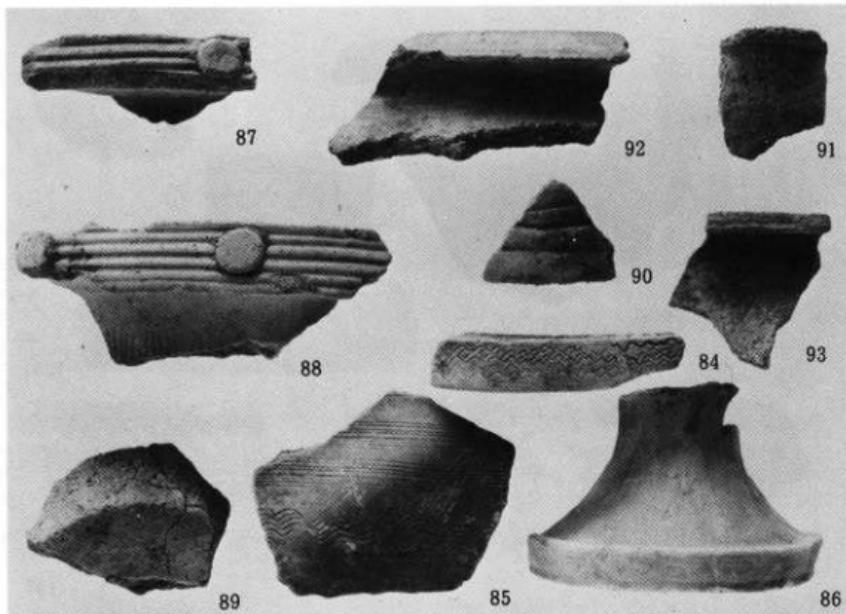
7-I・M, 17-A・B地区 包含層(72~77)

(72) h = 7.2, (73) h = 7.5, (74) h = 10.0, (75) h = 8.2, (76) h = 9.2, (77) h = 5.4



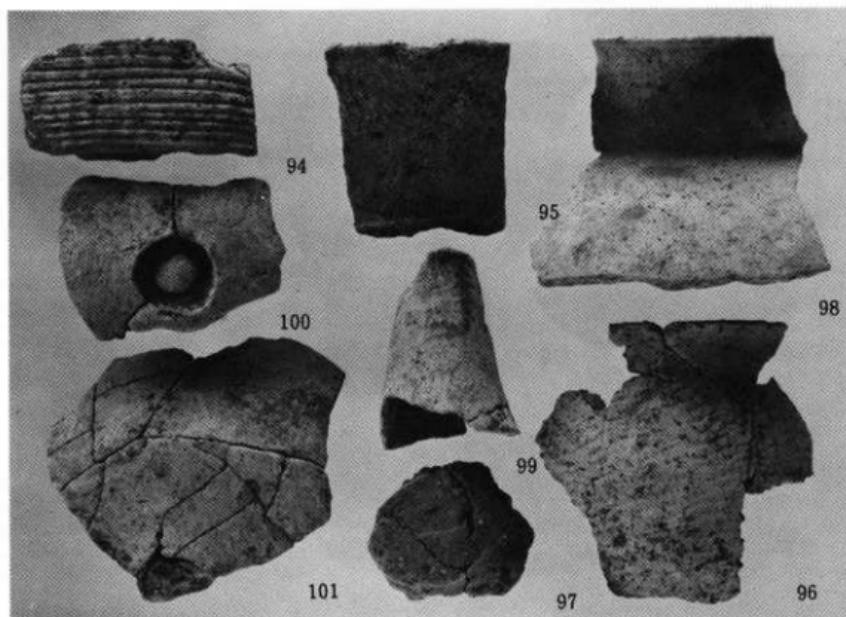
7 - I • M , 17 - A • B 地区 包含層 (78~83)

(78) $h = 7.5$, (79) $h = 8.0$, (80) $C = 8.5$, (81) $h = 8.5$, (82) $h = 8.5$, (83) $C = 10.3$



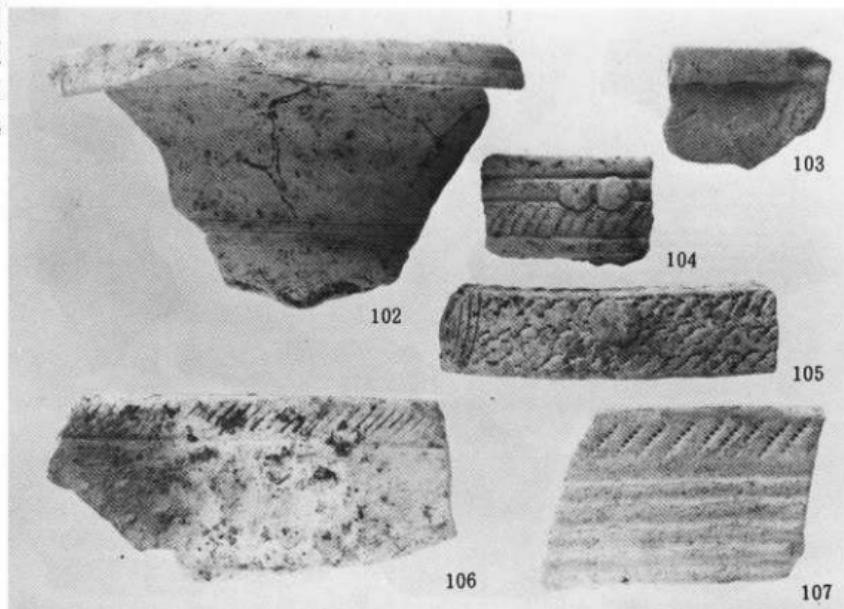
a. 7-I・M, 17-A・B地区 D1 (84~86), D10 (87~93)

約 $\frac{1}{2}$



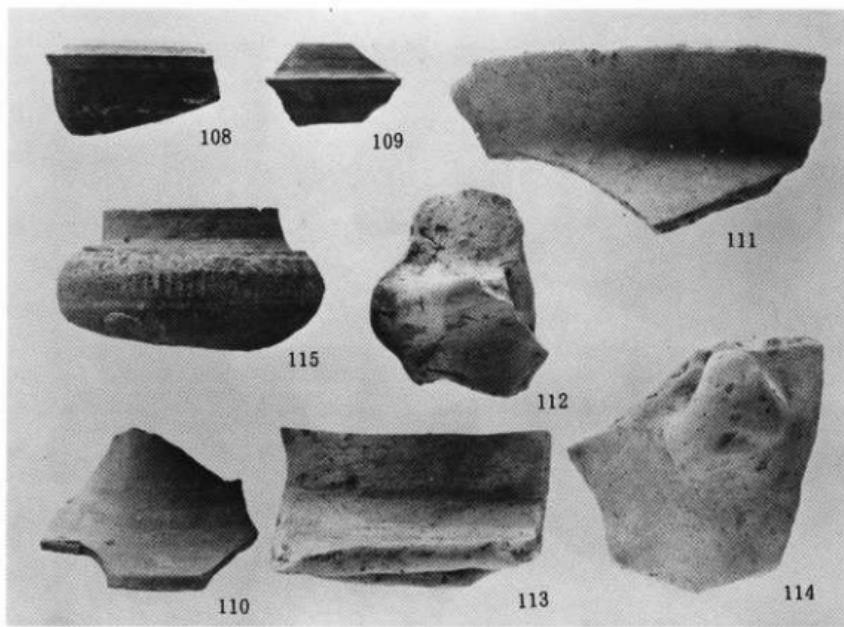
b. 7-I・M, 17-A・B地区 KH2 (94~101)

約 $\frac{1}{2}$



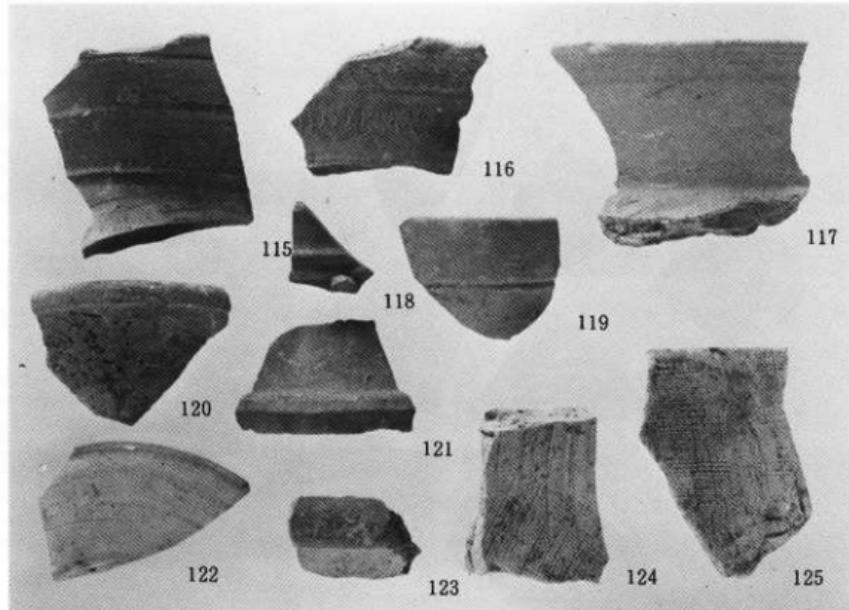
b. 7-I・M, 17-A・B地区 包含層(102~107)

約 $\frac{1}{2}$



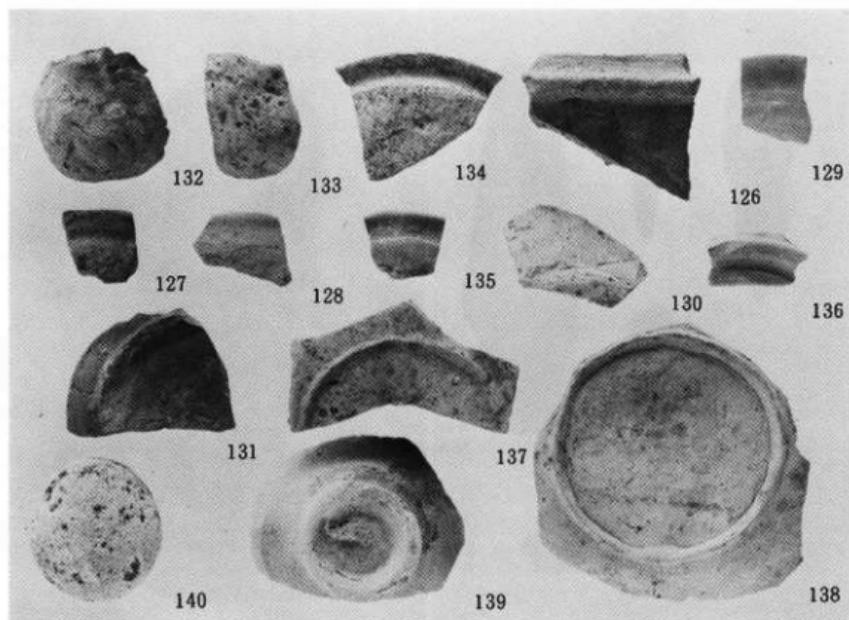
b. 7-I・M, 17-A・B地区 溝1(108~114), 包含層(108)

約 $\frac{1}{2}$



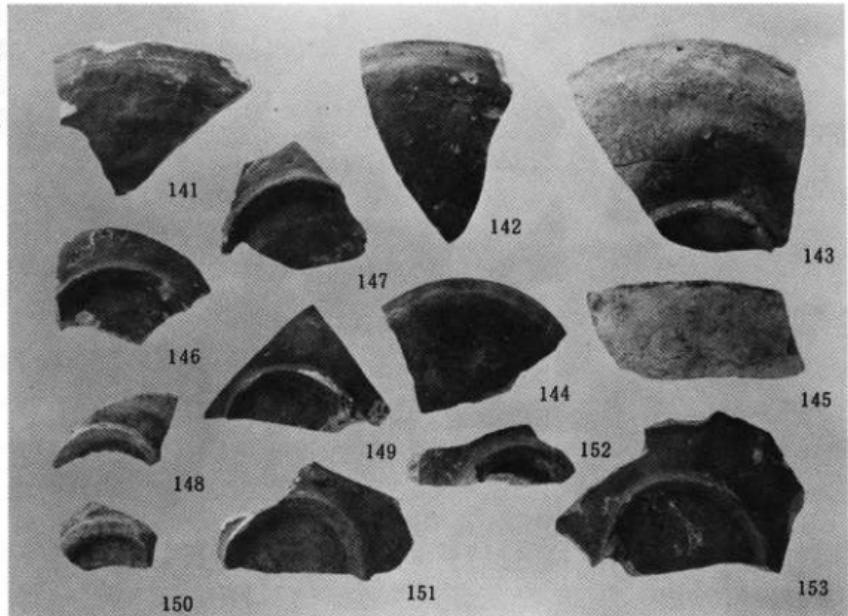
b. 7-I・M, 17-A・B地区 包含層 (115~125)

約 $\frac{1}{2}$



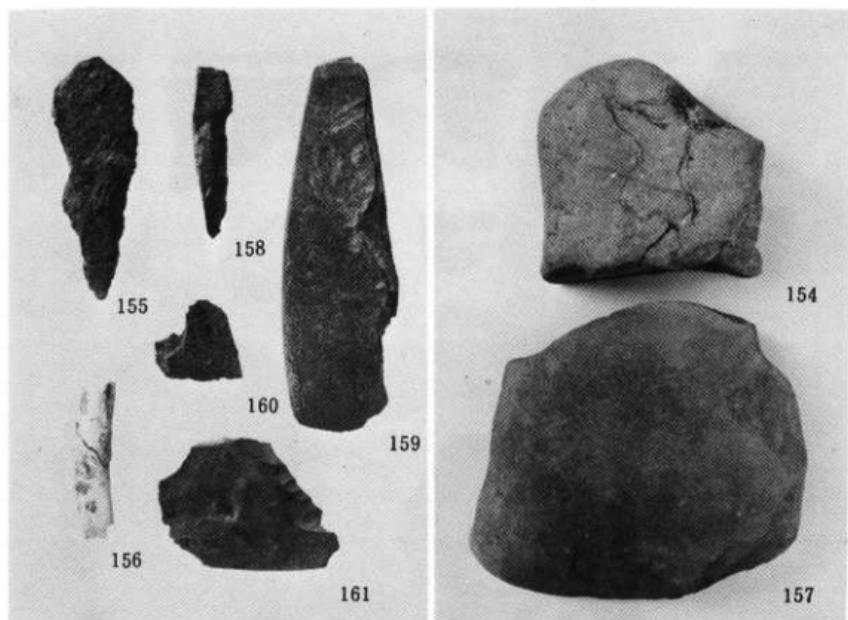
b. 7-I・M, 17-A・B地区 井戸2 (126~131), 包含層 (132~140)

約 $\frac{1}{2}$



a. 7-I・M, 17-A・B 地区 包含層 (141~153)

約 $\frac{1}{2}$



b. 7-I・M, 17-A・B 地区 KH 5 (154), KH 9 (155), KH 16 (156・157)
包含層 (158~161)

155・156・158~161 = 約 $\frac{1}{1}$ 154・157 = 約 $\frac{1}{6}$